

南あわじ市埋蔵文化財調査年報ⅩⅢ

2017年度 埋蔵文化財調査

2023年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅻ

2017年度 埋蔵文化財調査

2023年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会



木辺遺跡 遠景（南東から）



木辺遺跡 3区南（北から）



木辺遺跡 11区SD 117 (東から)



木辺遺跡 12区SB 2 (北西から)

はじめに

兵庫県最南端に位置する南あわじ市は、周囲を海に囲まれた自然豊かな自治体で、この環境を最大限に生かした農業や漁業は本市の魅力となっています。

この度、平成29年度に行った埋蔵文化財調査の成果を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報XII』として刊行する運びとなりました。今回の報告は、昨年度の報告同様に国衙地区と養宜地区の調査成果が中心となっており、国衙地区の調査においては、古代の倉庫群など大変興味深い遺構が見つかっています。また、平成27年4月に発見された松帆銅鐸の保存処理が完了し、昨年7月からは7点そろっての一般公開が南あわじ市滝川記念美術館玉青館で始まっています。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行など何かと暗い話題が多いですが、今後本市といたしましては、文化財の保護・継承や松帆銅鐸を核としたあらたな文化財の魅力を発掘し、明るい話題の発信に力を注いでまいりたいと考えていますので、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査ならびに本書を作成するにあたり、ご協力いただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

令和5年3月

南あわじ市教育委員会
教育長 浅井 伸行

例 言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市教育委員会が2017（平成29）年度に実施した埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は、南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貞・定松住重・的崎薫が担当した（所属については当時のものである）。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・清水善美・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・仲田高宏・樹本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4. 本書の編集は、坂口・宇治田が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、森岡秀人氏にご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。

目 次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第1章 埋蔵文化財事業の動向	1
第2章 埋蔵文化財調査の成果	2
第1節 埋蔵文化財調査一覧および調査位置図	2
第2節 主な埋蔵文化財調査の成果	4
1 城の土居城跡（1次調査）	4
2 国衙廃寺跡（7次調査）・木辺遺跡（3次調査）	5
3 入田稲荷前遺跡・姥畑遺跡・喜平前遺跡 ・南畑遺跡・森ノ腰遺跡・戒壇寺跡（2次調査） ・荒目遺跡（3次調査）・養宜上長手遺跡（1次調査）	29
4 中筋古城跡（2次調査）	51
5 門の上遺跡・南平遺跡・海田遺跡（1次調査） ・ハバ古墳（2次調査）	52

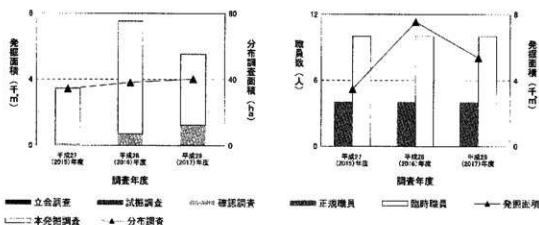
第1章 埋蔵文化財事業の動向

平成29年度は、分布調査3件、試掘調査3件、確認調査3件、本発掘調査1件の調査を実施した。試掘調査、確認調査、本発掘調査の調査面積の合計は、5,510.6㎡となる。主な発掘調査は神代国衙・賀集立川瀬地区、八木養宣上・養宣中・入田地区、志知志知北・志知南地区での県営園場整備事業に伴う発掘調査や民間の開発事業に伴う4件の調査などを実施し啓蒙普及活動として、4月に入田稲荷前遺跡から出土した貨幣の記者発表、10月には木辺遺跡の現地説明会を行った。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							正規職員	臨時職員
平成27(2015)年度	34.3	0	0	66.0	3,415.3	3,471.3	4	10
平成28(2016)年度	38.2	0	0	685.9	6,859.1	7,543.0	4	10
平成29(2017)年度	40.3	15.0	44.6	1,169.0	4,312.6	6,540.6	4	10

調査量と職員数の推移 1

*単位：分布調査 (ha) 調査面積 (㎡)



調査量と職員数の推移 2

また平成27・28年度に行った調査の「発掘調査速報展」の巡回展や松帆銅鐸関連事業で玉青館において島内に関係する青銅製品を集めた「淡路島のぶろんず展」、夏休み期間中には勾玉作りや銅鐸の鋳造体験などを行った。

さらに3月4日には、淡路ファームパークイングランドの丘で「古代体験フェスティバル」と小村眞理氏の講演会「松帆銅鐸の紐と古代の紡織技術について」を開催した。

刊行物としては、速報展のパンフレットと『南あわじ市文化財調査年報X』をそれぞれ発行した。(坂口)



木辺遺跡現地説明会の様子



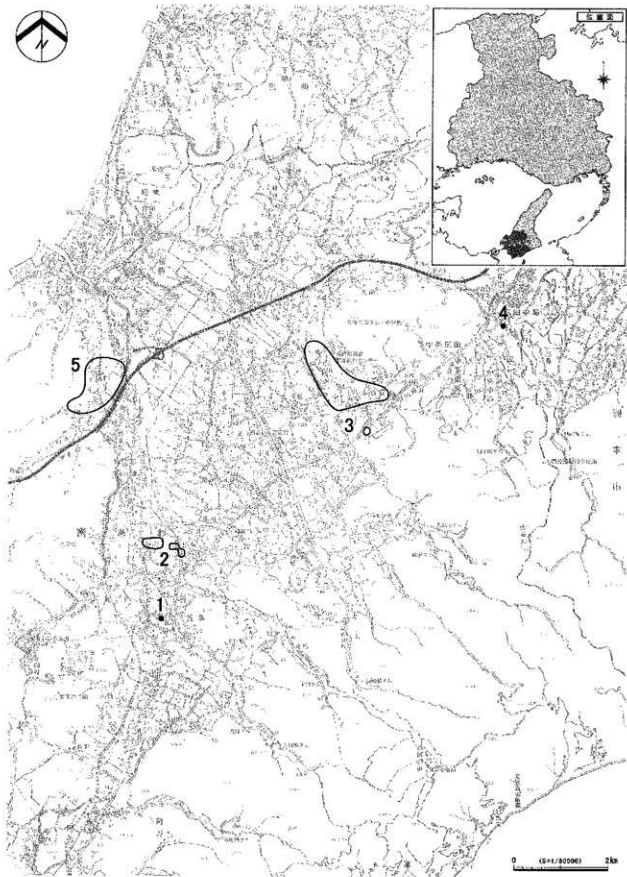
古代体験フェスティバルの様子

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧および調査位置図

番号	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	賀東池井岡史跡(民営)	確認	12 m ²	坂口	坂の土師遺跡	賀東	穂井	平成19年4月28日	中世の遺物がわずかに出土したが、遺構未確認。
2	緑野体育公園整備事業(国営地区)	本発掘	4,312.8 m ²	坂口・山崎・的崎	国東原古跡(7次) 木田遺跡(3次)	神代・賀集	国領・立川渡	平成19年6月10日～平成20年1月29日	弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安時代の遺構・遺物確認。
		試掘	12 m ²	山崎	山崎	阿刀	下町	平成19年5月22日	遺構・遺物未確認。
3	緑野体育公園整備事業(国営地区)	確認	19 m ²	的崎	八田起町遺跡群(2次) 松原遺跡(2次) 西平遺跡(2次) 南郷遺跡(2次) 飯沼遺跡(3次) 若ノ原遺跡(2次) 成徳寺跡(2次) 高守上長手遺跡(1次)	八木	奥堂上・鑿堂上・入田	平成19年6月16日～平成20年1月23日	縄文時代～室町時代の遺構・遺物確認。
		立会	19 m ²	山崎	中筋100跡(2次)	広野	中郷	平成19年6月5日	弥生時代後期の遺物確認。
5	緑野体育公園整備事業(市道地区)	確認	78 m ²	山崎	門の上遺跡(1次) 南平遺跡(1次) 高川遺跡(1次) 八六古墳(2次)	志知	志知北・志知南	平成19年8月21日～12月18日	平安時代～中世の遺構・遺物確認。
		試掘	8 m ²	的崎		広野	中郷	平成19年11月24日	遺物がわずかに出土したが、遺構未確認。
	防災公園緑地事業	試掘	31 m ²	山崎		賀集	八幡	平成19年12月5・6日	遺構・遺物未確認。
	緑野体育公園整備事業(阿刀・町地区)	分布	14.1ha	的崎		阿刀	下町	平成20年2月13日～3月13日	律令期～中世の遺物探索。
	北沢河原南西側遺跡事業	分布	28.8ha	定松		松帆	鹿野	平成20年2月22日～25日	遺構・遺物未確認。
	市領屋敷事業(民営)	分布	0.4ha	山崎		賀集	八幡	平成20年3月2日	遺物未確認。

調査一覧



調査位置図

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1. 城の土居城跡 - 1次調査 -

所在地 賀集福井 (字式本木) 外
 事業名 賀集福井開発事業 (民間)
 担当者 坂口弘貢
 種別 確認調査
 調査機関 平成29年4月28日
 調査面積 12㎡ (2×2m3ヶ)



調査の位置

1. 調査内容

本調査は、賀集福井地区で計画されている分譲住宅地の造成事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野南部に位置しており、標高37m前後を測る水田などからなる。

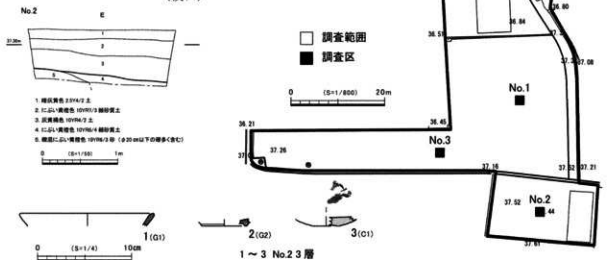
調査は、事業対象地内のすでに宅地化されている北部を除いた圃場部分に2×2mの調査区3ヶを設定し、重機・人力併用で行った。

調査の結果、No.1・3調査区では、耕作土直下にベースとなる礫混にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂が堆積する。一方南部のNo.2調査区では、耕作土 (1層) とベースとなるにぶい黄橙色 (10YR6/4) 細砂質土 (4層) ・礫混にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂 (5層) の間にぶい黄橙色 (10YR7/3) 細砂質土 (2層) ・灰黄褐色 (10YR4/2) 土 (3層) から瓦器1・2、青磁3など中世の遺物がわずかに出土したが、遺構は確認できなかった。

2. まとめ

以上の通り、事業対象地内において、遺構は確認できなかったが、わずかに遺物が出土したことから、周辺に遺構が分布する可能性がある。

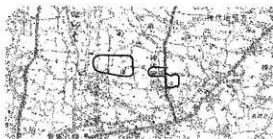
(坂口)



調査区設定図・層序図・出土遺物

2. 国術廃寺跡 - 7次調査 - ・ 木辺遺跡 - 3次調査 -

所在地 賀集立川瀬631(字東良)外
 事業名 経営育成基盤整備事業
 (国術地区4-2・5-1・5-21区)
 担当者 坂口弘貴・山崎裕司・的崎薫
 種別 本発掘調査
 調査機関 平成29年5月10日～平成30年1月28日
 調査面積 4,312.6㎡



調査の位置

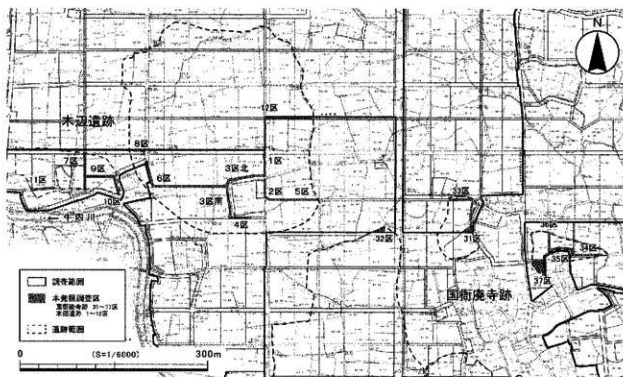
1. 調査内容

本調査は、神代国術～賀集立川瀬地区で計画されている景観園場整備事業に伴う本発掘調査である。

調査地は、三原平野中央南寄りの南東～北西方向に緩やかに傾斜する水田などからなり、南側を牛内川が流れる。調査地北西部には嫁ヶ淵遺跡(縄文・弥生・飛鳥・奈良・平安時代、中世)、東部には長手遺跡(弥生時代、中世)などが分布する。今回の工事範囲内には国術廃寺跡と木辺遺跡がそれぞれ遺跡登録されている。

調査は、平成25・26年度に行った確認調査結果に基づき、地下の文化財に影響が及ぶ排水路と園場部分を対象に重機・人力併用で進めていった。なお調査区名は、国術廃寺跡については、平成27・28年度の調査(1～30区)に引き続き31～37区、木辺遺跡については1～12区と呼称することにした。

以下主な調査区の概要を記す。



調査区設定図

国術廃寺跡

[31区]

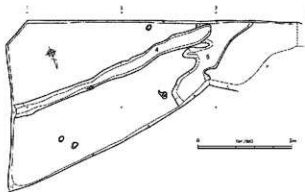
調査地東部に位置する圍場部分の調査区である。調査面積 82.9 m²。

東から西へ流れる溝4を検出した。埋土から平安時代末から鎌倉時代頃と思われる土師器皿1が出土した。(山崎)

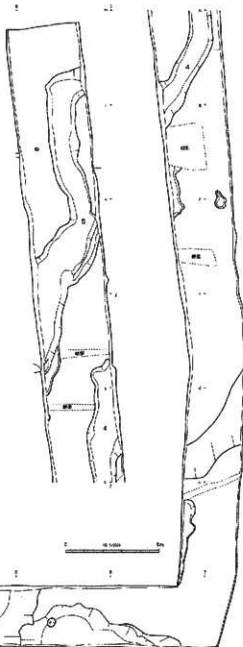
[33区]

調査地東部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 280.7 m²。

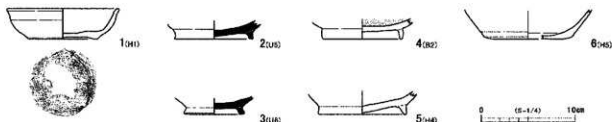
溝4からは須恵器環B身の底部2・3等が、溝5からは黒色土器埴4・土師器埴5・土師器環A6・丸瓦7・平瓦8等が出土しており、平安時代前半頃に機能していた溝と



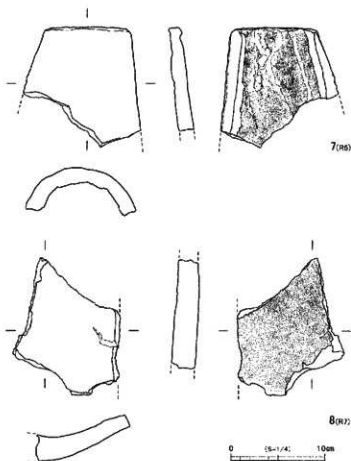
31区 平面図



33区 平面図



31・33区 出土遺物



33区 出土遺物 2

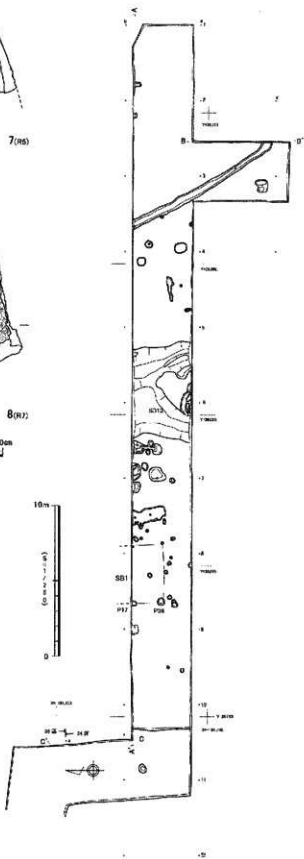
推定される。両溝は直線的ではないが2～3mの間隔を空けて続いていくことから、道路側溝であった可能性が高い。(山崎)

[34区]

調査地東端部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積246.7㎡。

ベースは礫を多く含んだ層となる部分が多く、遺構・遺物は共に少ない。中世の掘立柱建物1棟、溝、土坑、小穴などを確認した。

S B 1 調査区西部7 a～8 a区に位置する掘立柱建物で北側にのびると考えられる。南北1間(1.8～2.0 m)以上、東西2間(3.9 m)の側柱建物で、P 36-17を基準にした方位は、座標北に対して、N 2° Wを示す。遺物は非常に少ないが、P 36から桶形型の鍋口縁部9などが出土しており、中世後半が想定される。周辺には小穴が幾つか分布しており、大半は



34区 平面図

建物と同時期と思われる。また輪の羽口 11 や他の調査区では鉄滓が出土おり、周辺の小字名“カンジャ”（鍛冶からの転化か？）を考慮すれば、周辺域で鍛冶作業を行っていた可能性が高い。

SD 13 調査区中央部 5 a ~ 6 a 区に位置する南北方向の溝である。北半部で合流する。遺物は、ほとんど出土しておらず、詳細な時期は明確ではないが、先の SB 1 と同様の中世後半と思われる。



34 区 出土遺物

(坂口)

木辺遺跡

[1 区]

調査地中央部に位置する排水路と圍場部分調査区である。調査面積 276.6 m²。

黄色系の細砂～礫混の砂層をベースに掘立柱建物 5 棟、土坑、溝などを確認した。

SD 2・3 調査区北部 2 c、3 c・d 区に位置する溝状の遺構である。いずれも深さ 10 cm 程度で、わずかではあるが、弥生土器底部 12・13 が出土している。

SB 1 調査区中央部 4 c ~ 5 c 区に位置する掘立柱建物である。桁行 2 間 (3.8 ~ 4.2 m)、梁行 2 間 (3.2 ~ 3.3 m) の側柱建物で、P 35-23 を基準した方位は座標北を示す。北側の中央部分の柱穴が欠く。遺物は須恵器 14、土師器、製塩土器が出土しており、奈良時代前半と考えられる。

SB 2 調査区中央部 4 c ~ 5 c 区に位置する掘立柱建物で東側にのびると考えられる。南北 3 間 (4.8 m)、東西 1 間以上で、P 58-27 を基準にした方位は座標北に対して N 2° E を示す。遺物は須恵器 15 ~ 20、土師器、製塩土器 21 が出土しており、奈良時代前半と考えられる。

SB 3 調査区南東部 8 c ~ 9 d 区に位置する掘立柱建物である。桁行 3 間 (5.3 m)、梁行 2 間 (3.45 ~ 3.5 m) の側柱建物で、P 53-51 を基準にした方位は座標北に対して N 88° E を示す。遺物は須恵器 22・23、土師器、製塩土器が出土しており、奈良時代前半と考えられる。

SB 4 調査区西部 8 e ~ 9 f 区に位置する掘立柱建物である。桁行 2 間 (4.65 ~ 4.8 m) 以上、梁行 2 間 (4.45 m) の側柱建物で、P 55-38 を基準にした方位は座標北に対して N 10° W を示す。遺物は須恵器 24 ~ 26、土師器 27、製塩土器 28、鉄製品が出土しており、奈良時代前半と考えられる。

SB 5 調査区北部 3 c ~ 4 c 区に位置する掘立柱建物で東・南側にのびると考えられる。南北 2 間 (5.95 m) 以上、東西 1 間以上で、P 4-11 を基準にした方位は座標北に対して N 16.5° W を示す。遺物が出土しておらず、明確な時期は不明であるが、弥生時代と思われる。

SK 19 調査区中央部 5 c 区に位置する遺構で SB 1 の 1.3 m 南にある。東西 2.4 m、南北 1.0 m、深さ約 10 cm を測る。SB 2 の P 58 に切られると思われる。遺物は須恵器 29 ~ 32、土師器 33・34、製塩土器 35・36、鉄製品が出土しており、奈良時代前半と考えられる。

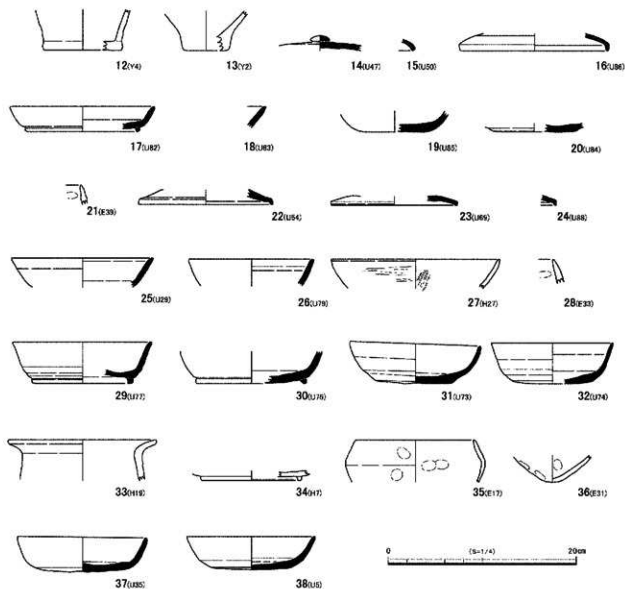
SD 1 調査区北部 1 c ~ 2 c 区に位置する東西方向の溝である。幅 0.96 ~ 1.44 m、深さ 20 cm を測る。遺物は古代の須恵器、土師器などに混じって、底部回転糸切りの土師器塊（底部）が出土しており、中世と思われる。

(坂口)

[3 区]

調査地中央部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 394.4 m²。

東西方向の水路を挟んで南北（3 区北と 3 区南）に分かれる。3 区北では、ベースが 2 a 区以東では



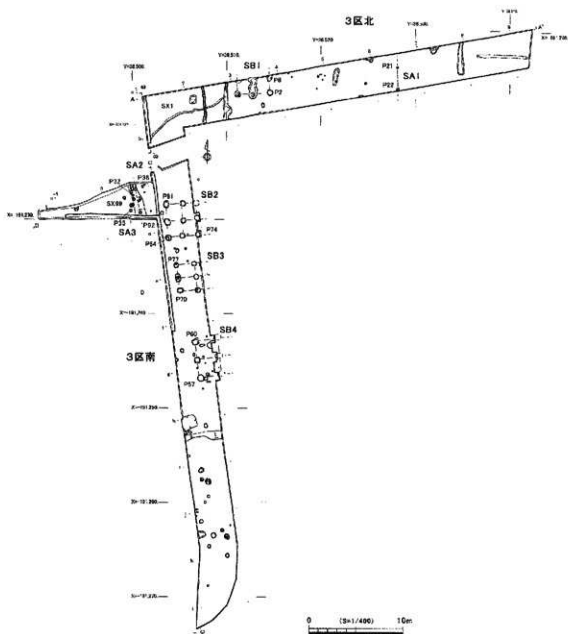
12 2c SD2 13 3c ~ 3d SD3 14 SB1(4c P30) 15 SB2(5c P37) 16 ~ 21 SB2(5c P58) 22 SB3(8d P28) 23 SB3(8c P44)
 24 ~ 27 SB4(9e P61) 25 SB4(9e P63) 26 ~ 28 SB4(9e P55) 29 ~ 36 5c SK19 37 ~ 38 5c 包含層

1区 出土遺物

黄色系の土層、1 a区周辺では黒色系の土層、3区南では1 a区周辺と同様の褐色～黒系の土層となる。掘立柱建物4棟、柱列、落込み、溝、小穴などを確認し、3区北では中央部～西半部、3区南では北半部を中心に遺構が分布する傾向が認められる。

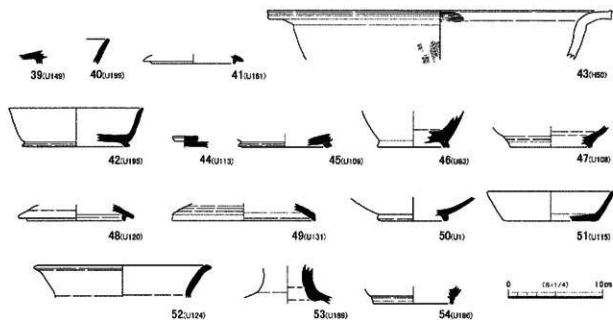
SB1 調査区西部3 a区に位置する掘立柱建物で北側にのびる。桁行1間 (1.65 ~ 1.8 m) 以上、梁行2間 (3.5 m) の側柱建物で、P 2- 8を基準にした方位は、座標北を示す。遺物は非常に少ないが須恵器 39、土師器が出土しており、奈良時代前半と思われる。

SB2 調査区北部1 c ~ 1 d区に位置する掘立柱建物で東側にのびると思われる。南北2間 (3.6 m)、東西2間 (3.25 m) 以上の総柱建物で、P 84-81を基準にした方位は座標北に対してN



3区 平面図

- 5° Wを示す。遺物は少ないが、土師器、須恵器40、製塩土器が出土しており奈良時代前半と思われる。
- SB3 調査区北部1d～1e区に位置する掘立柱建物で東側にのびると思われる。南北2間(2.95m)、東西1間(1.75～1.9m)以上の総柱建物と考えられ、P70-77を基準にした方位は座標北に対してN8°Wを示す。遺物は少ないが、土師器が出土しており、奈良時代前半と思われる。
- SB4 調査中央部に位置する掘立柱建物で東側にのびると思われる。南北2間(3.9m)、東西1間(2.3m)以上の総柱建物と考えられ、P57-60を基準にした方位は座標北に対してN8°Wを示す。遺物は少ないが、土師器が出土しており、奈良時代前半と思われる。
- SA1 調査区東部6a区に位置する柱列又は柵列状の遺構で、南北方向にのびると思われる。柱の間



39 SB1(3a P2) 40 SB2(1d P74) 41 SA1(6a P22) 42 SA3(0c P32) 43 SA3(0c P35)
44~47 1a~2b SX1(上層) 48~52 1a~2b SX1(下層) 53~54 0b~0c SX99

3区 出土遺物

幅が2.35mで、深さはP21が15cm、P22が14cmを測る。P22-21を基準にした方位は座標北に対してN1.5°Wを示す。遺物は土師器、須恵器41、製塩土器が出土している。41の須恵器は飛鳥時代と思われるが、小破片であり遺構埋没時の混入が推測され、遺構の時期は奈良時代前半と思われる。周辺は遺構が非常に少なく、区画施設が想定される。

SX1 調査区西部1b~2a区に位置する落込みである。南東~北西方向に傾斜しており北西部が深く、約20cmを測る。遺物は奈良~平安時代の須恵器44~52、土師器、製塩土器などが出土しており、東・南の建物群周辺の遺物が流れ込んだような状況と思われるが、各個体はあまり大きくない。

SX99 調査区北部0b~0c区に位置する落込みである。SB2の西側約2mから西方向に向かってベースが傾斜する。遺物は奈良~平安時代の須恵器53・54、土師器、製塩土器が出土している。落込み周辺には直径20cm前後の小穴又は柱穴状の遺構がやや密集して分布しており、明確ではないが、南北方向に櫓又は塙状の区画施設が復元できる可能性がある(SA2・3)。SA2は柱の間隔が2.5mでP92-36を基準にした方位は座標北に対してN10°Wを示す。SA3は柱の間隔が2.0mでP35-32を基準にした方位は座標北を示す。遺構から土師器、製塩土器の小片や、P32からは須恵器42、P35からは土師器43が出土しており、奈良時代前半と思われる。(坂口)

[6区]

調査地の東部~中央部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積772.8㎡。

g~hブロックで、近世の鋤溝と耕地を区画していたと思われる溝4を検出した。

b・eブロックでは古墳時代中期の土器だまり57・58が形成されており、土器だまり58では白玉55~65や管玉66を含む10点以上の滑石製品が出土し、出土土器の中には高坏70~72が多く含まれる。

祭祀遺構の可能性が高い。どちらの土器だまりも西の調査区外へ続いている。

f～gブロックの土器だまり 50 からは、弥生時代中期後半の甕 75・76、高坏 79、ミニチュア土器 77 等が出土した。西の調査区外へ続いている。

2 ブロックの溝 2 は出土遺物が無く、時期不明である。

6～8 ブロックにかけて耕作土のほぼ直下から掘り込まれる 2 条の溝を確認した。

溝 1 は遺構 10 を切る北西方向に走る溝である。溝 1 の埋土はベースの色と似ていたため、上層では検出できていない。出土遺物には須恵器杯 H 80 等、飛鳥時代の遺物も含むが、下層から奈良時代の須恵器底部 81 が出土している。

遺構 10 は幅 7 m 以上の南北方向の溝で、多量の遺物が出土している。断面などから主に上層・中層・下層・最下層に分けることができた。上層は奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器を含む。中層は飛鳥時代の須恵器杯 H 88～90 や短頸壺 93、奈良時代の須恵器杯 B 身 92 や丸底 IV 式の製塩土器 82 等、主に飛鳥～奈良時代の遺物を含む。下層は弥生時代中期後葉・終末期、古墳時代中期～飛鳥時代の遺物を含むが、特に古墳時代中～後期の遺物が多く、大量の土師器高坏 97～104、また紡錘車 131 や滑石製白玉 127～130 等、祭祀関係の遺物が目立つ。また、市内でも古墳時代中期の祭祀遺物が見つかっている遺跡（木戸原遺跡・雨流遺跡）で出土が確認されている須恵器を模倣して黒色研磨された土師器杯 105・106 を含むことが特筆される。下層から出土した弥生時代終末期の遺物の中には、東阿波型土器や庄内甕といった島外からの搬入品も含む。最下層は弥生時代中期後葉・終末期・古墳時代中期の遺物を含み、滑石製品勾玉 132 が出土している。勾玉は扁平で、長さが 3.8 cm で古墳時代中期末頃と思われる。遺構 10 は工事の関係で溝の底までは掘削できていない。

6 区は大日川が大きく蛇行する攻撃斜面側に位置し、遺構 10 はそこから派生した旧河道の一部であったと思われる。弥生時代には流水していたようだが、古墳時代には滞水しはじめ、古墳時代中期～飛鳥時代にかけて水辺の祭祀場として使用されたものと推測され、奈良時代前半に埋没したと考えられる。

9～12 ブロックでは g～h ブロック同様、細い溝などを確認したが、近世の遺構と思われる。

12～20 ブロックは全体的に遺物が乏しく、近世遺構も混在するが、古墳時代中期～平安時代の遺構と考えられる溝や土坑・小穴などの遺構を検出した。遺構 16 は細い溝で、須恵器模倣土師器や製塩土器丸底 I 式が出土していることから、古墳時代中期と思われる。遺構 30 からは製塩土器丸底 IV a 式が出土し、飛鳥～奈良時代前半と推測される。

6 区では建物跡は確認できなかったことから、居住には適さなかったようである。 (山崎)

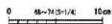
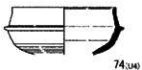
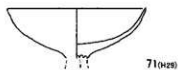
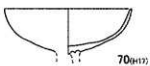
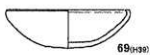
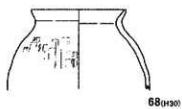
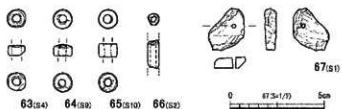
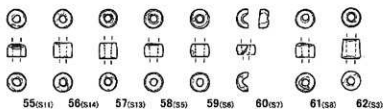
[7 区]

調査地西部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 402.7 m²。

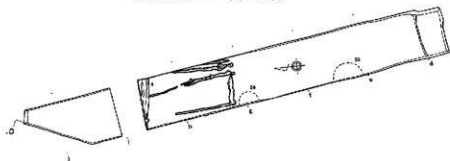
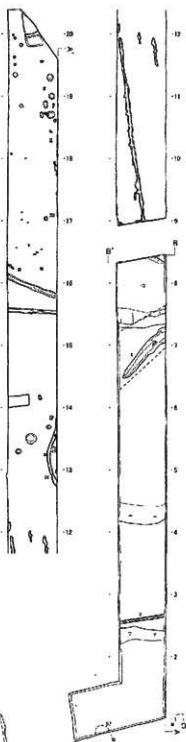
遺構面を 2 面確認した。第 1 面のベースは、黒褐色～暗灰黄色の土層となり、掘立柱建物 2 棟、土坑、溝、小穴などを確認した。遺構の大半は調査区南半部、1 a～3 a 区までに集中する。

S B 1 調査区南端 1 a～2 a 区に位置する掘立柱建物で西側にのびる。南北 2 間 (4.65 m)、東西 1 間 (2.0～2.1 m) 以上の総柱建物で東・南方向に廊と考えられる柱列が認められる。P 9-58 を基準にした方位は座標北に対し N 6° W を示す。遺物は土師器 135・136、磁器 137・138、須恵器などが出土しており中世と考えられる。また先の遺物に混じって焼土が多く含まれる。

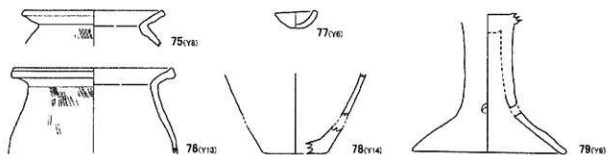
S B 2 調査区南部 3 a 区に位置する掘立柱建物で東側にのびる。南北 2 間 (2.85 m)、東西 2 間 (3.0～3.1 m) 以上の側柱建物で、P 65-62 を基準にした方位は座標北に対して N 85° E を示す。遺物は



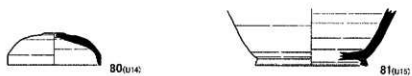
土器だまり 58 出土遺物



6区 平面図

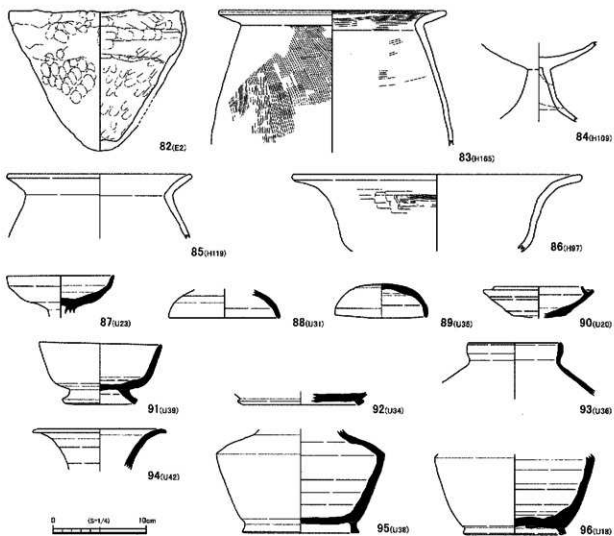


土器だまり 59 出土遺物



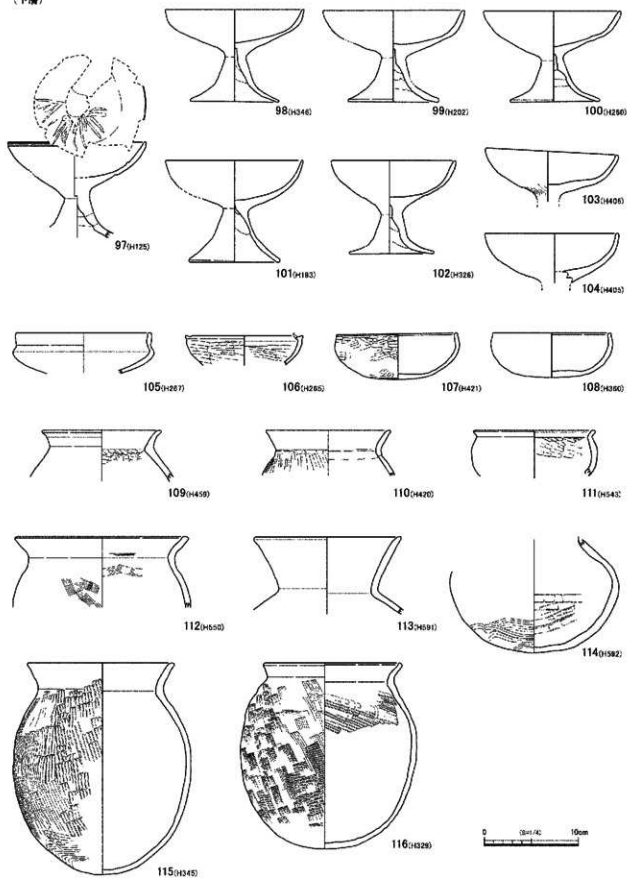
溝 1 出土遺物

(中層)



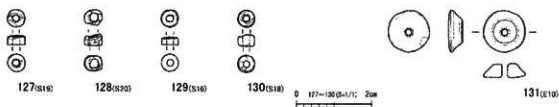
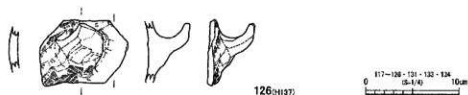
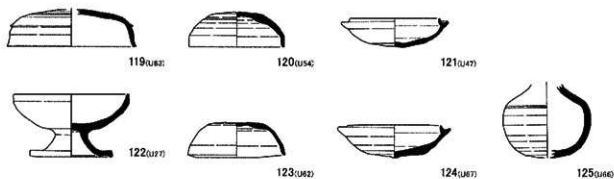
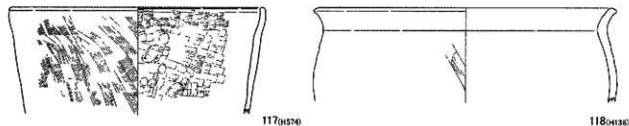
遺構 10 出土遺物

(下層)

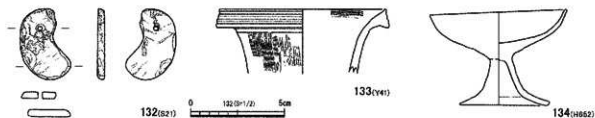


遺構 10 出土遺物

(下層)



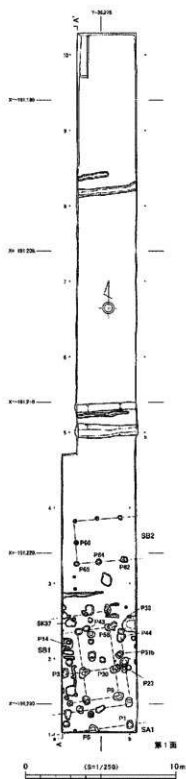
(最下層)



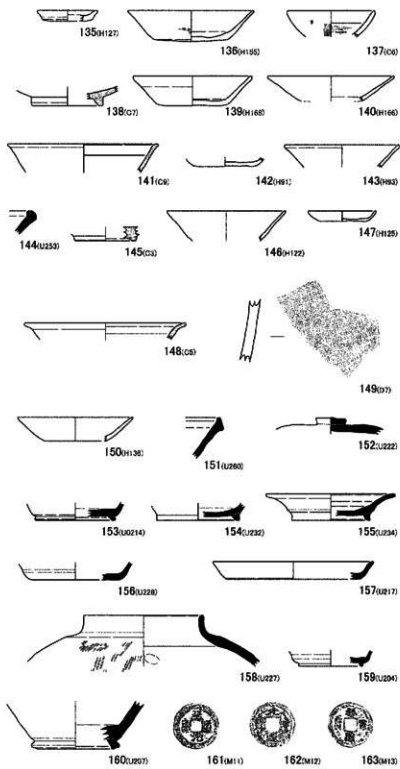
遺構 10 出土遺物

土師器 139・140、磁器 141、P 65 から古銭 3 枚 161～163（至道元寶、元豊通寶、祥符通寶）、鉄製品などが出土しており、S B 1 とほぼ同時期中の中世と思われる。

SA 1 調査区南端 1 a 区に位置する柱列で、西・南方向にのびると思われる。部分的な確認のため詳細は不明であるが、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が高い。東西 1 間 (2.5 m) 以上で P 5-1 を基



7区 平面図



0 133~160土器(S-1/A) 100cm

0 161~163土器(S-1/B) 5cm

135 SB1(1a P30) 136 ~ 138 SB1(2a P44) 139 SB2(3a P66) 140 SB2(3a P64)
 141-161 ~ 163 SB2(3a P65) 142 SA1(1a P1) 143 1a P3 144 1a P23
 145 2a P14 146-147 2a P33 148 1a ~ 2a P31b 149-150 2a P37 151 2a P43
 152 4a 第1面ベース土 153-157 3a 第1面ベース土 154-155 6a 第1面ベース土
 156-158 5a 第1面ベース土 159-160 2a 包含層

7区 出土遺物

準にした方位は座標北に対してN 83.5° Eを示し、S B 1に平行する。遺物は土師器 142などに混じってS B 1同様に焼土が多く含まれており、中世と考えられる。

S K 37 調査区南部2 a区に位置する土坑である。長辺74cm、短辺50cm、深さ26cmで“大”と刻書された陶器片 149や土師器 150が出土しており、南側に隣接するS B 1と同時期中世と考えられる。

また建物周辺の遺構からは、中世の土師器や須恵器などが出土がしている。

第2面の遺構は、人為的なものではなく自然の落ち込みや窪み状の遺構のみで、遺物は弥生土器と思われる土器片がわずかに出土しているのみである。ただし第1面のベースとなる土壌などには、須恵器 152～160、土師器、製塩土器など古代の遺物が一定量含まれることから、周辺には古代の遺構が存在する可能性がある。(坂口)

[9区]

調査区西部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 197 m²。

調査区内のベースは、オリーブ色～黒色系の土層となる。近現代と思われる暗渠や溝、浅い窪み状の遺構や古墳時代の落込みなどを確認した。地下水位が非常に高いことや確認した遺構から、居住域でなかったと考えられるが、調査区東部から古墳時代中期の遺物がまともって川土していることや7区の状況から周辺には居住域の遺構が広がる可能性がある。

S X 8 7 a～8 a区に位置する南北方向にのびる落込みで、幅2.7～5.6m、深さは南側が深くなり約60cmを測る。遺物は古墳時代中期頃の土師器 164～178を中心に須恵器の高坏と思われる脚部 179が出土しているが、土師器は全体に摩滅が著しく、遺存状態が悪い。

S D 10 9 a～10 a区に位置する溝で南西～北東方向にのびる。幅約50cm、深さ約40cmで座標北に対してN 55° Eを示す。遺物は土師質の土器片が出土しており、S D 8と同時期か飛鳥時代と思われる。(坂口)

[10区]

調査地西部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 114 m²。

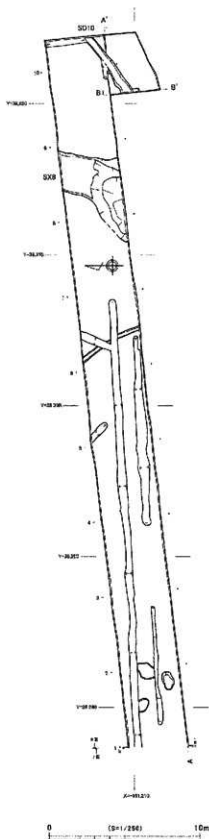
工事の掘削深度の関係から第1面の調査のみ行った。調査区内のベースは、黒色系～黄色系の土層となる。浅い溝状の遺構を確認した。9区同様に居住域でなかったと考えられる。調査区の南半部に位置するS D 4は幅が一定せず、深さは深い部分で約30cmを測る。遺物は弥生時代終末期の土器 181・182に混じって中世の土師器鍋体部が含まれることから中世と思われる。また遺構のベースとなる土層に弥生時代終末期の土器 183～186が含まれることから、下層に弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。(坂口)

[11区]

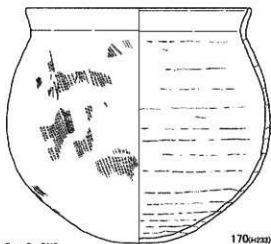
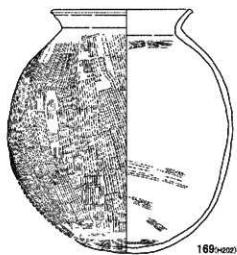
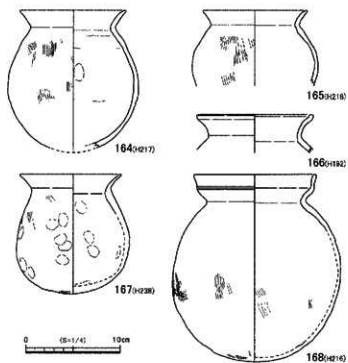
調査地西端部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 302.7 m²。

遺構面を2面確認した。第1面は調査区西西部の黒色系の土層と東部の黄色系の砂層をベースに、中世の掘立柱建物3棟、流路、溝、土坑、小穴や古墳時代の溝などを確認した。特に2 a～5 a区に中世の柱穴状の遺構が密集する傾向が認められる。

S B 1 調査区中央部3 a～5 a区に位置する掘立柱建物で南側にのびると思われる。東西3間(7.1m)、南北1間以上の建物で、東・西・北方向の柱列は廂になる可能性が高い。P 72-105を基準にした方位は座標北に対してN 76.5° Eを示す。遺物は土師器 191～196や砥石 197などが出土しており、室町時代と考えられる。

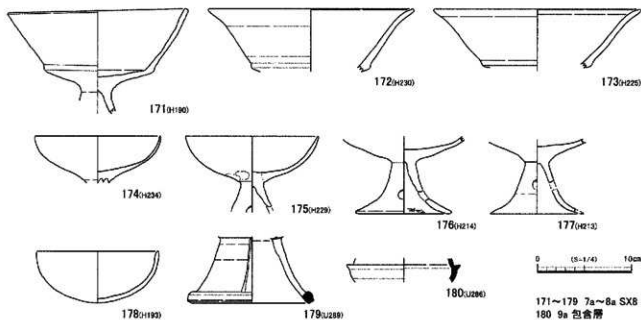


9区 平面图



164~170 7a~8a SX8

9区 出土遺物 1



9区 出土遺物 2

S B 2 調査区中央部3 a～5 a区に位置する掘立柱建物で北側にのびると思われる。南北1間(1.5～1.7 m)以上の総柱建物と思われ、P 50-91を基準にした方位は座標北に対してN 75° Eを示す。遺物は土師器 198・199などが出土しており、室町時代と考えられる。

S B 3 調査区西半2 a～3 a区に位置する掘立柱建物で北側にのびると思われる。南北1間(1.7～1.8 m)以上、東西1間(1.9 m)の側柱建物で、P 54-37を基準にした方位は座標北に対し、N 10.5° Wを示す。遺物は土師器、須恵器こね鉢片が出土しており、室町時代と思われる。

S K 92 調査区中央部5 a区に位置する土坑である。長辺2.3 m、短辺1.4 m、深さ約20 cmで土師器 209などが出土しており、室町時代と考えられる。

S D 96 調査区中央部5 a区に位置する溝である。幅30 cm、深さ約10 cmである。遺物は土師器片がわずかに出土した。建物を含めた中世の遺構の大半は、この溝の西側に展開するため、区画の溝の可能性が高い。

S R 8 調査区西端部1 a区に位置する自然の流路と思われる遺構である。深さが約1.3 mで南東方向から北西方向にのびる。遺物は中世の土師器 200～205などが出土している。

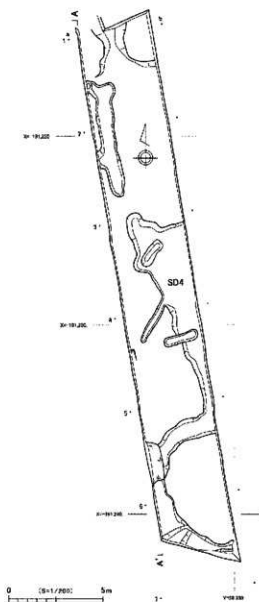
S D 64 調査区中央部4 a区にある南北方向の溝である。幅約3.0 m、深さ84 cmを測る。遺物は土師器 210～217が出土しており、古墳時代前半期頃と思われる。

第2面の遺構には溝や流路などがあり、基本的に弥生時代の遺構と考えられる。

S D 117 調査区南端7 a～8 a区に位置する弧状をなす溝で、北側にのびる。幅約1.0 m、深さ約40 cmを測り、遺物は弥生時代中期後葉の完形の壺 218が出土している。



S D 117 遺物出土状況(南から)

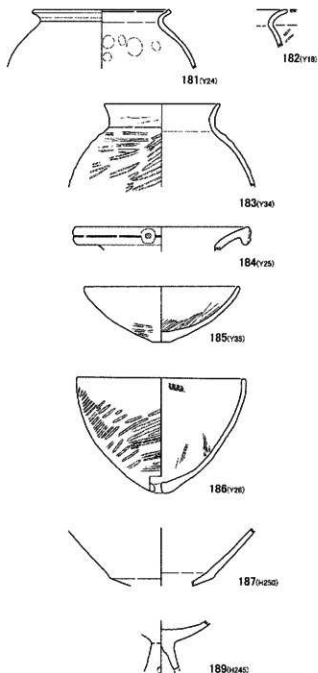


10区 平面図

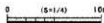
溝の形状や出土遺物から直径6.5m前後の円形周溝墓の可能性が高い。

SR 130 調査区西部1a～2a区に位置する自然の流路と思われる遺構である。第1面の中世の流路SR 8をわずかに東方向にずらした形で南東から北西方向に流路の肩部が確認できた。深さは約1.0mを測る。遺物は弥生土器219～221・223・224や石斧と思われる石器225が出土している。

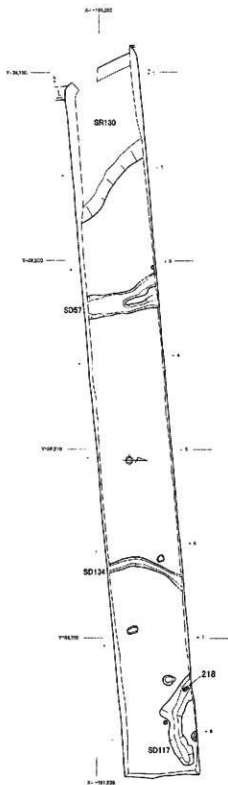
SD 57 調査区中央部3a区に位置する南北



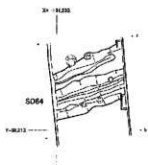
181・182 2a～5a SD4 183・186 2a ベース土
184・185 3a ベース土 187・189 2a 包含層
188 1a 包含層 190 3a 包含層



10区 出土遺物

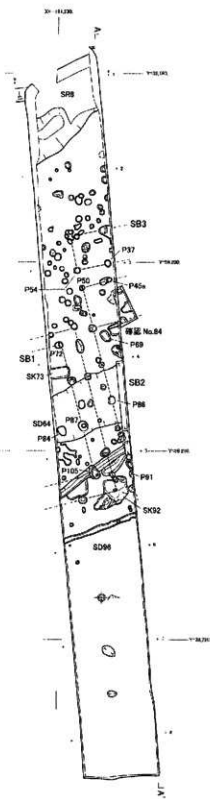


第2图

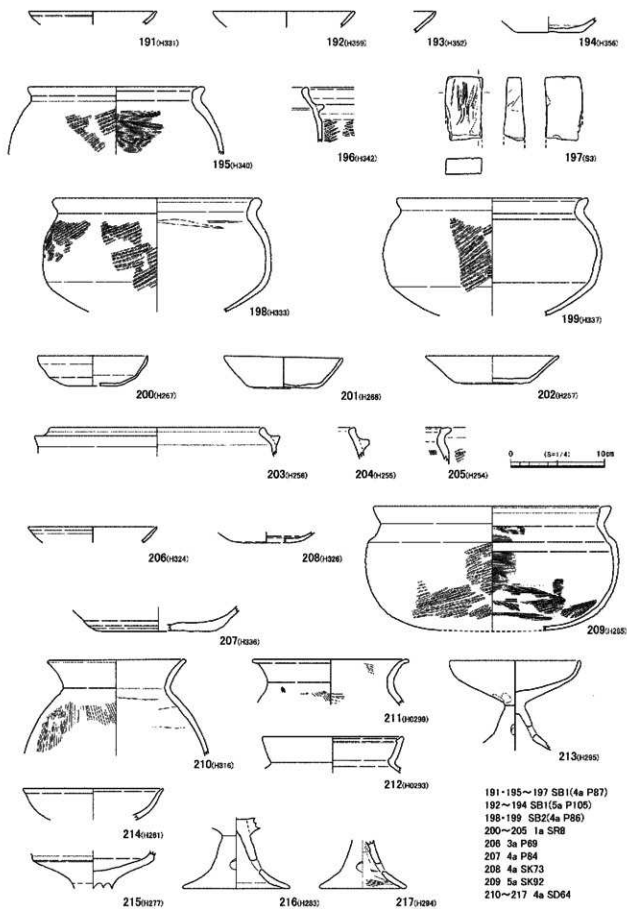


0 1:1,200 5m

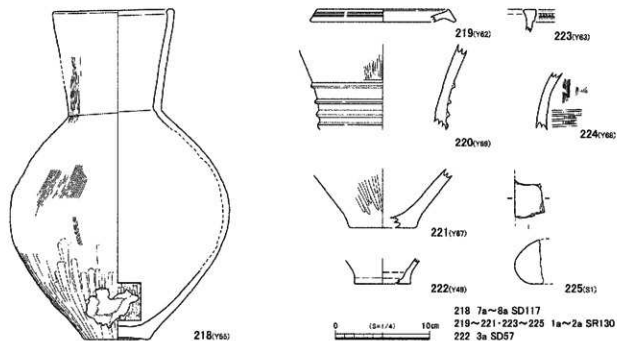
11区 平面图



第1图



11区 出土遺物 1



11区 出土遺物 2

方向の溝である。幅約 1.2 m、深さ 18 cm で北半部が 2 条に分かれる。弥生土器 222 が出土している。
 SD 131 調査区東部の 6 a 区で南北方向の溝である。幅 30 ~ 50 cm、深さ約 40 cm を測る。遺物は土師質の小さな土器片がわずかに出土している。
 (坂口)

[12区]

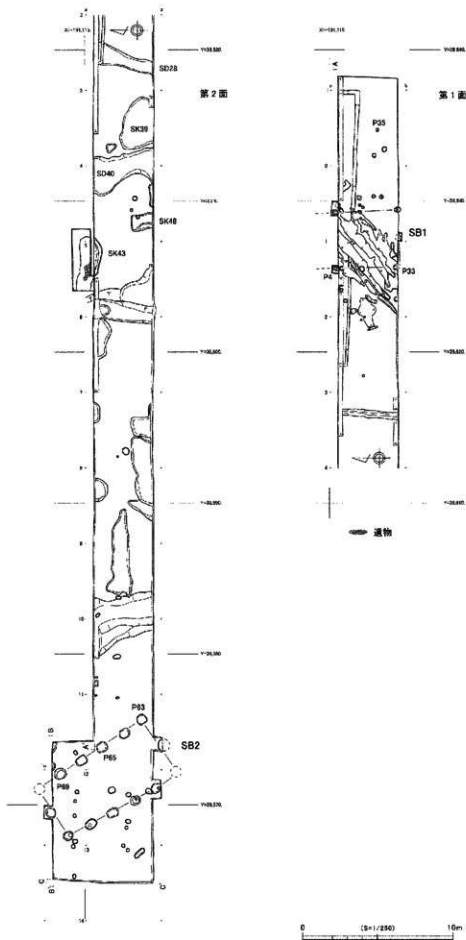
調査地中央北寄りに位置する排水路部分の調査区である。調査面積 325.3 m²。

遺構面が東半部で 2 面確認できるが、西半部では 1 面となる。第 1 面は調査区東半の褐色系の土層をベースとする遺構で、掘立柱建物 1 棟、溝などがある。西半部にも小穴などがあるが、非常に少ない。第 2 面は、東半部の黄褐色と西部の黄色系の細砂質土をベースとする遺構で、飛鳥時代の掘立柱建物 1 棟、弥生時代の土坑や溝などがある。

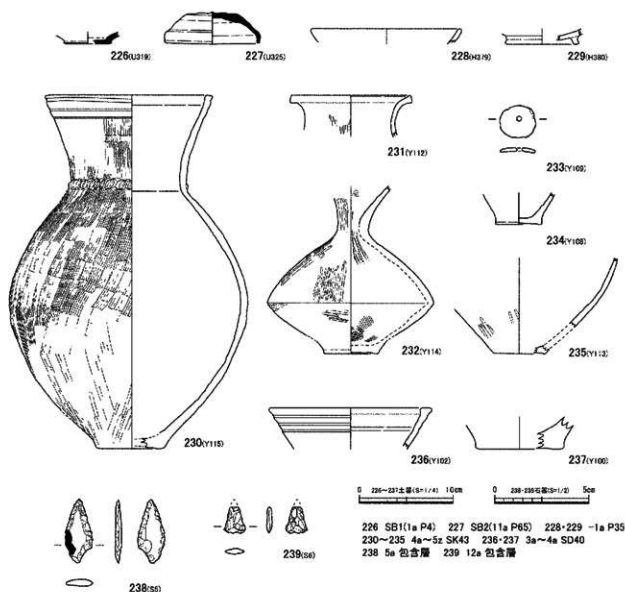
SB 1 第 1 面の遺構で調査区東部 0 a ~ 1 a 区に位置する掘立柱建物で北側にのびる。南北 2 間 (4.0 ~ 4.2 m) 以上、東西 2 間 (3.8 m) の側柱建物で、P 33-4 を基準にした方位は、座標北に対して N 1° W を示す。遺物は須恵器 226、土師器などが出土している。また建物の 5 m 東 P 35 から出土している土師器 228・229 から平安時代後期の時期が想定される。

SB 2 調査区東端部 11 a ~ 12 z 区に位置する掘立柱建物である。西北部と南東部中央の柱は、外側にわずかに飛び出す近接棟持柱と思われ、南北 5 間 (8.3 ~ 8.4 m)、東西 1 間 (4.3 m) の側柱建物と考えられる。P 63-69 を基準にした方位は座標北に対し、N 33° W 方向を示す。遺物は小さな土師器片が中心であるが、P 65 から須恵器 227 が出土しており、7 世紀前半が考えられる。また柱穴から弥生時代終末期の土器片が部分的に出土しており、周辺に同時期の遺構が存在する可能性が高い。

SD 40 調査区東部 3 a ~ 4 a 区に位置する溝で南北にのびる。東西幅は広い部分で約 3.3 m、深さ約 40 cm で、遺物は弥生時代中期後葉の土器 236・237 が出土している。その東と西には、同じ弥生時代中期と思われる土器がわずかに出土する浅い溝状の遺構 SD 28 や土坑状の遺構 SK 39 などが分布している。



12区 平面図



226 SB1(1a P4) 227 SB2(11a P65) 228・229 -1a P35
 230～235 4a～5z SK43 236・237 3a～4a SD40
 238 5a 包含層 239 12a 包含層

12区 出土遺物

SK 43 調査区中央部4 a～5 z区に位置する東西方向に細長い土坑で、西側にのびる。南北幅約1.5 m、深さ34 cmで弥生時代中期後葉の土器230～235が出土している。(坂口)

2. まとめ

国術鹿寺跡では、古代と中世の遺構・遺物が確認することができた。古代については、33区周辺でややまとまって遺物が出土している。ただし、溝などからの遺物が中心で、居住域ではなかったと思われるが、出土遺物の中に瓦が含まれることから周辺に瓦葺建物が存在している可能性がある。

中世については、調査地東端部の34～37区周辺で遺構・遺物を確認することができたが、遺構の分布量・遺物量共に少なく遺跡の中心からは、離れた様な状況である。遺物の中に鉄滓や鑄の羽口が認められることと、周辺の地名と合わせてみると、鍛冶遺構が存在する可能性が高く、注意を要する。

木辺遺跡では、弥生～中世の遺構・遺物を確認することができた。弥生時代は12区で溝などからややまとまって中期の遺物が出土した。住居跡は確認できていないが、1・12区周辺が中期の居住域になると考えられる。さらに地下水位が高い6・9区を挟んで11区で周溝墓を1基確認した。溝の形状から円形周溝墓となる可能性が高く、墓域を形成していることが想定される。

古墳時代は地下水位が高い6区で祭祀跡（3ヶ所）や9区で遺構を確認した。祭祀跡の2つは古墳時代中期の土器だまりから滑石製品と大量の土師器が見つかった。もう一つは自然流路状の溝で古墳時代中期～飛鳥時代に土師器の高坏などを使用して繰り返し祭祀が行われた様子が伺える。飛鳥時代の祭祀に対応する時期の建物が1棟、12区西端部で確認できた（SB2）。建物の方位が座標北に対しN33°Wと後述する南北方向を示す古代の建物群とは傾きが異なることが指摘できる。

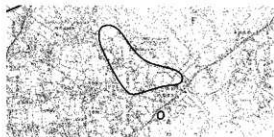
奈良・平安時代は、1・3区を中心に建物群を確認した。いずれも奈良時代前半期の南北方向を意識した建物群で、側柱建物と総柱建物がややまとまりを持って展開することが指摘できる。出土遺物に官術的なものは認められないが、建物群の確認状況などから、官術的な遺跡と評価することができよう。

中世は調査地西部の7・11区周辺で建物群を確認でき、周辺が中世の居住域であったと考えられる。いずれの建物も調査区外にのびるため、全体規模は不明であるが、柱穴の深度が深く比較的規模が大きなものが含まれる。また7区では陶器の体部に“大”の刻書が認められるなど注意を要する。

（坂口・山崎）

3. 入田稲荷前遺跡・鈍畑遺跡・喜平前遺跡・南畑遺跡・森ノ腰遺跡・戒壇寺跡 - 2次調査 -
 荒目遺跡 - 3次調査 - 養宜上長手遺跡 - 1次調査 -

所在地 八木入田・養宜中・養宜上
 事業名 経営体育成基盤整備事業（養宜地区）
 担当者 的崎薫
 種別 確認調査
 調査期間 平成29年5月26日～平成30年1月25日
 調査面積 448㎡（2×2m 109ヶ、1×3m・
 1×4m・1×5m各1ヶ）



調査の位置

1. 調査内容

調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野北東部の標高20～57mを測る成相川右岸～養宜川の両岸に位置する田圃地帯で、調査地の北端で養宜川が成相川に合流している。調査地やその周辺には入田山古墳群や上八木古墳・養宜館跡（県指定史跡）・南畑遺跡・戒壇寺跡・入田稲荷前遺跡・城の山城跡など多くの遺跡が周知の遺跡として包蔵されている。

平成25年度に上記事業に伴って分布調査を行った結果、広範囲に遺物の散布が認められた。よって、地下の埋蔵文化財の有無を確認するため、遺跡範囲確認調査を行うこととなったが、当地区は農業が盛んな地域であることから、一年の大半の期間を農作物の栽培を行っている田圃も多く、2カ年計画で地元との調整を取りつつ調査を進めた。平成28年度には、150ヶ所の調査区を調査し、広範囲で遺構・遺物を確認した。今年度は前年度の調査成果も考慮して、2×2mの調査区を109ヶ所、1×3m・1×4m・1×5mの調査区をそれぞれ1ヶ所、養宜館周辺に設定した。なお、調査対象地が広範囲であるため、遺跡ごとにまとめ、調査番号順に主な調査区のみを記述している。また、文章中の弥生時代の時期区分については前期（I様式）・中期前葉（II様式）・中期中葉（III様式）・中期後葉（IV様式）・後期（V様式）・終末期（庄内併行期）としている。

(A) 入田稲荷前遺跡

養宜川の右岸、河岸段丘の低位段丘面に広がる遺跡である。この遺跡は平成28年度に重点的に調査を行っていたため、おおよその遺跡範囲については絞り込めていた。よって今年度は前年度に行えなかった地点や遺跡範囲が曖昧であった部分などに追加調査を行った。

№157 遺跡の南端部に位置し、地形の傾斜とは逆方向の東側に落ち込む遺構を検出した。断面観察から遺構埋土は9層に掘り込まれた4～8層であることがわかった。8層には弥生時代中期後葉後半の遺物が多く含まれ、縄文土器が僅かに混じていた。3層は中世の遺構と思われる。

№159 南部に位置し、地山であるにぶい黄褐色細砂質土をベースにした北側に落ち込む浅い土坑と小穴を検出した。浅い土坑からは弥生時代後期後半～終末期の土器が多く出土した。

№160 南部に位置し、にぶい黄褐色細砂に掘り込まれた大きな遺構の一部を検出した。遺構深度は32cmほどあり、底面はほぼフラットで、古代の須恵器や土師器に混じて弥生時代後期の土器が出土した。断面観察からこの遺構に掘り込まれた遺構を確認したが、時期は不明である。

№.163 中央部に位置する。前年度の確認調査成果では、河岸段丘崖下の調査区は養宜川の氾濫原にあたり、厚い堆積層が確認されている。この調査区も氾濫原にあたり、遺物を多く含んだ厚い砂～シルト層が堆積していた。7層より上では古代以降の遺物が含まれるが、8層以下は弥生時代後期後半の遺物1～6が大量に出土し、中には完形に近い甕や器台1、淡路型甕や沖積地の胎土を持つ搬入品などが含まれていた。南西隅では遺物を含まない地山と考えられる層(24・25層)を一部確認したが、調査区の大半は表土直下から1.2m以上掘削しても遺物7～9を多く含んだ層(22・23層)が下へと継続していた。湧水と軟弱な堆積層による壁崩落の危険があったことから、無遺物層までは確認できなかった。

№.164 中央部に位置し、地山である黄褐色粘質土で遺構を4基検出した。この内、埋土の異なる1基は、上層の黒褐色粘砂質土を遺構面としていたことがわかり、遺構面が2面あったことを確認した。遺構から時代を判別できる明確な遺物は出土していないが、黒褐色粘砂質土には古代の遺物が含まれていた。

№.165 中央部に位置し、地山である礫を多く含む灰黄褐色粘質土で土坑などの遺構を3基検出した。この内1基はすぐ上層の暗褐色粘砂質土を遺構面とした遺構であったが、2面の遺構の出土遺物にはあまり時期差がなく、古代の範疇と考えられる。

№.166 北部の段丘崖下に位置する調査区で、湧水が激しい。飛鳥時代の須恵器を多く含む層を確認したが、周辺からの流れ込みと考えられる。地山であるにぶい黄褐色粘砂質土に掘り込まれた土坑などの遺構を4基検出した。遺構からは奈良時代前半の土師器や須恵器10・製埴土器が出土している。

№.167 北部に位置する。上層の暗灰黄色粘質土には飛鳥時代末の遺物が含まれるが、下層の砂～礫層は弥生時代中期後葉後半の遺物を含む旧河道と考えられ、瀬戸内系甕や製作途中段階の金山産サヌカイトなどの搬入品も出土している。前年度に周辺で行った№.44・45も旧河道であったことを確認している。

№.178 南部に位置し、遺構面を2面確認した。第1遺構面では、10層をベースにした埋土が異なる溝や柱穴などの遺構を検出し、切り合いも見られた。遺構3(9層)と遺構7(8層)が先行する遺構で、その後その他の遺構が掘り込まれたようである。遺構から出土した土器は奈良時代頃のものであり、時期差はあまりない。第2遺構面では、地山である15層をベースにした弥生時代後期後葉～終末期の3基の遺構を検出した。土坑である遺構8からは弥生土器が多く出土し、東阿波型土器11なども含まれている。浅い土坑である遺構9からも東阿波型土器が出土した。遺構8と遺構9から出土した土器は接合関係にあり、同時期に埋没したことがうかがえる。

№.199 中央部や北に位置し、古代の遺物を含む黒色粘土に掘り込まれた遺構を確認した。直上の包含層にも古代の遺物が含まれていることから、遺構は古代の可能性が高い。また、地山である黄褐色粘土をベースにした遺構が周辺に存在する可能性がある。

(B) 姥畑遺跡

成相川と養宜川の合流部分に位置する遺跡である。前年度の調査では、2つの川の間で微高地部分に遺跡が広がっているのを確認している。

№.168 北部に位置し、地山であるにぶい黄褐色粘砂質土をベースにした埋土が異なる遺構を2基検出した。出土遺物から弥生時代後期と古代以降の遺構と考えられる。

No. 169 中央部に位置し、地山である礫混灰黄褐色粘砂質土に掘り込まれた柱穴などの遺構を5基検出した。遺構からは弥生時代終末期の淡路型甕や東阿波型土器などが出土している。

No. 170 北部に位置し、比較的養宜川に近い調査区である。6層に掘り込まれた飛鳥～奈良時代の遺構（5層）を断面で確認した。7～13層からは弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺物12～17が多く出土し、完形品に近い土器や淡路型甕・河内型庄内甕・生駒西麓産の土器・東阿波型土器・北近畿の影響を受けた器台・勾玉形土製模造品12・脚台Ⅲ式製塩土器16などが含まれていた。勾玉形土製模造品の出土から、水辺の祭祀が周辺で行われていた可能性があり、最下層には養宜川の旧河道と考えられる砂礫層（14層）を確認している。

No. 171 北部に位置し、No. 170 同様に比較的養宜川に近い。中層の黒褐色粘細砂質土～下層の黒色粘質シルトは飛鳥～奈良時代の湿地層であり、下層には植物遺体が多く含まれていた。最下層の黒褐色砂礫層には弥生時代終末期～古墳時代初頭の上器が含まれていたが、掘削深度の限界から更に下への調査は断念した。この調査区は、もともと養宜川の河道であったものが湿地となって堆積した場所と考えられる。

No. 177 中央部に位置する調査区で、ほぼ耕作土直下で褐色粘質土+にぶい黄褐色シルト質土をベースにした古代以降の土坑を検出した。下層には養宜川の影響を受けた遺物を含む層が堆積していた。

No. 179 南端に位置し、地山であるにぶい黄褐色極細砂質土+黄褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を確認した。遺構面上層には土師器や製塩土器・飛鳥時代の須恵器が含まれることから、遺構は飛鳥～奈良時代の範疇と考える。

No. 181 中央部に位置する。上層の褐色砂質土をベースにした古代以降の遺構を断面で確認した。この遺構面より下は成相川の氾濫原にあたる古代の須恵器や土師器を含む堆積層で、さらに下層にも遺物を含む層は続いていた。

No. 198 北部に位置する。古代の遺物を含むにぶい黄褐色粘細砂質土に掘り込まれた柱穴などの遺構を8基検出した。遺構埋土は3～4種類あったが、出土遺物からは古代の範疇としかわからなかった。遺構面には、古代の遺物の他に周辺から流れ込んだ縄文土器が含まれていた。

No. 233 南部に位置する調査区で、9層に掘り込まれた竪穴住居を検出した。調査区の東端で僅かに確認した竪穴住居の肩部などから、住居の形状は円形の可能性が高い。床面は礫層で、柱穴1を確認した。竪穴住居の埋土には弥生時代後期後葉～終末期の遺物が多く含まれ、東阿波型土器や淡路型甕・紡錘車18、37×26×13cmの使用痕のある台石も出土している。また、断面観察で5層に掘り込まれた古代か中世と思われる遺構（4層）も確認した。

No. 234 北部に位置し、養宜川の影響による砂層が堆積している調査区である。8層に掘り込まれた土坑などの遺構を検出した。遺構1・2は遺構3を切る遺構で、遺構3からは室町時代の土師器や瓦器・陶器が出土している。11・16層からは土師器とともに縄文時代後期前葉の土器19・20が出土している。前年度の調査では、対岸にある入田稲荷前遺跡（No. 148）からも同時期の遺物が出土し、関連性が考えられる。

No. 257 南部に位置する調査区で、地山であるにぶい黄褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を4基検出した。遺構には切り合いが見られたが、遺構からの遺物は少なく、古代の範疇としかわからない。遺構面より上層には鎌倉時代と古代の遺物包含層が堆積していた。

No. 258 南部に位置する調査区で、遺構は確認できなかったが、弥生時代後期中葉～古代の遺物を多く

含む層を確認し、東阿波型土器の壺21も出土した。下層には美宜川の影響を受けた砂礫層が堆積する。

(C) 喜前遺跡

美宜川右岸の狭い緩斜面に位置する遺跡で、城の山城跡の東、上八木古墳が北に隣接する。前年度に行った調査で遺構を確認したため、当初の設定より調査区を増やして調査を行った。

No.212 遺構面を3面確認した。第1遺構面は5層をベースにした南に落ちていく遺構1と断面観察から遺構2を確認した。遺構1からは底部糸切りの土師器皿や白磁・備前焼などが出土したことから、室町時代の遺構である。第2遺構面は6層をベースにした細い溝状の遺構3で、飛鳥時代前半の須恵器23が出土している。しかし、5・6層には須恵器の長頸壺22や坏を含む飛鳥時代末の遺物が多く含まれることから、遺構3もこの時期と考えられる。第3遺構面では地山である8層に掘り込まれた遺構4・5を検出した。遺構から時期を判別できる遺物は出土していないが、飛鳥時代の範囲と推測される。

No.213 遺構は確認できなかったが、飛鳥～室町時代の遺物を大量に含む包含層を確認した。

No.214 にぶい黄褐色粘砂質土に掘り込まれた小穴を1基検出した。時期は不明である。

No.215 にぶい黄褐色粘土～黄褐色粘質土をベースにした遺構を確認した。時期は不明である。

No.216 地山である褐色粘質土～礫混にぶい黄褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を北隅で確認した。時期は不明である。

No.218 明黄褐色粘砂質土+にぶい黄褐色砂質土をベースにした遺構を3基検出した。遺構からは底部糸切りの土師器皿が出土していることから、中世と考えられる。また、この遺構面より下には古代の遺物が含まれることから、地山である礫混にぶい黄色砂質土をベースにした古代の遺構が周辺に存在する可能性がある。

No.219 8層をベースにした土坑などの遺構を8基検出した。遺構2の埋土だけ他の遺構と異なり、鎌倉時代の遺物が含まれていたことから上層にはもう一面遺構面が存在していたと推測する。その他の遺構には弥生時代後期後半～奈良時代の遺物が含まれることから、奈良時代の遺構と考えられる。8層以下は地形に沿うように南側に傾斜する弥生時代後期後半～終末期の遺物24～27を多く含む包含層で、中には集落外からの搬入品が数点含まれていた。

No.221 地山である10・11層に掘り込まれた土坑などの遺構を3基検出した。遺構の埋土は全て異なり、遺構3からは飛鳥時代の遺物出土した。4～7層からは奈良時代の遺物が多く出土し、丸底IV式の製塩土器28が多く含まれる。また鍛冶関連の鑪の羽口や鋳滓なども出土していることから、周辺で鍛冶が行われていたものと考えられる。

No.241 美宜川に近い調査区であったが、しっかりと地山の19層に掘り込まれた土坑を2基と小穴を1基検出した。土坑は2基とも調査区外へと続くため規模は不明だが、大きな遺構と推測される。土坑からは飛鳥時代後半頃の須恵器や土師器・製塩土器などが出土した。遺構面より上層の5～8層にもこの時期の遺物29が多く含まれていた。

(D) 南畑遺跡

成相川と美宜川に挟まれ、縄文時代の石器が表面採集できる遺跡として周知されているが、縄文時代の遺構は今まで確認されていなかった。前年度の調査で、遺跡範囲が南側に広がることが判明し、戒壇寺跡との境界が不明瞭になってしまったため、今年度の調査では遺跡範囲とともに戒壇寺跡との境界線

を明確にすることも目的の一つとした。

No. 173 北部に位置する調査区で、暗褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を確認した。遺構からは僅かな土師器が出土しているが、時期の判別は難しく、中世の範疇と思われる。

No. 201 西端に位置する調査区で、地山である11層に掘り込まれた2基の遺構を検出した。水道管理設などによる攪乱を受けているため、遺構の性格などはよくわからないが、遺構1は西方向に落ちていく土坑である。遺構からは弥生時代後期～終末期頃の遺物が出土している。

No. 222 西部に位置する調査区で、地山である褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を3基検出した。遺構から遺物は出土していないため、時期は不明である。

No. 223 西部に位置する調査区で、弥生時代後期と縄文時代前期前葉の遺構を検出した。縄文時代の遺構5(4・5層)が調査区の中で広範囲に広がっていたことから、当初は遺構であることがわからなかったため、弥生時代の遺構4基を第1遺構面として調査した。その後、全体を少し下げたことによって縄文時代の遺構であることが明確になり、それを第2遺構面とした。第2遺構面では溝状の遺構などを確認した。遺構5からは縄文時代前期前葉の土器のほかにサヌカイト製の石錐も出土している。南知遺跡は縄文時代の石椁が表面採集できる遺跡として有名であるが、遺跡範囲内で遺構を確認できたのはこの調査区のみである。

No. 246 東部に位置する調査区である。耕作土直下のにぶい黄褐色粘質土に掘り込まれた小穴を2基検出した。この調査区からは遺物が全く出土していないため、時期は不明である。

No. 256 北東端に位置する調査区で、地山である2層に掘り込まれた遺構を2基検出した。遺構からは中世の遺物が出土している。

(E) 荒目遺跡

養宜川左岸、養宜館の北～東に位置する遺跡で、今までの調査で広範囲に広がっている事が確認されている。今年度は養宜館周辺を重点的に調査した。

No. 154 西部に位置する調査区で、地山である7～10層上面で土坑や柱穴などの遺構を6基検出した。この内、遺構6は南壁全城にかかる浅い土坑(4層)で、瓦器や瀬戸天明茶碗など室町時代の遺物が出土している。その他の遺構からは鎌倉時代の遺物が出土している。

No. 155 西部に位置し、地山である礫混黒色粘質土に掘り込まれた遺構を確認したが、時期は不明である。直上にある包含層からは室町時代の輸入青磁碗や瀬戸天明茶碗などが出土している。

No. 156 西部に位置する調査区である。地山である礫混黒褐色シルト質粘土～粘質シルトに掘り込まれた浅い土坑状の遺構を断面観察で確認した。直上の包含層には弥生時代中期末～後期と奈良時代の遺物が多く含まれる。

No. 174 この遺跡の西端に位置する。礫を多く含んだ黒色粘質土に掘り込まれた柱穴などの遺構を3基確認した。遺構から出土した遺物は少ないが、中世と考えられる。

No. 175 養宜館の東側の道路に面する調査区である。養宜館に関連する漆などの痕跡を確認するため、道路際から直行する1×4mの調査区を設定した。結果的には養宜館に関連する明確な遺構や遺物は確認できなかったが、包含層からは弥生時代後期の土器や仕上げ用の目の細かい砥石が出土している。周辺から弥生時代の遺構が確認される可能性は高い。

No. 176 西部に位置する調査区で、地山である礫混黒褐色粘砂質土をベースにした小穴を4基検出し

た。遺物が僅かであるため、時期の判別が難しい。

No.186 南西部に位置する調査区で、遺構面を2面確認した。同一面での検出となったが、4層をベースにした遺構2・5は古代か中世の柱穴で、6層をベースにした遺構1・3・4・6は弥生時代後期後葉の遺構である。

No.187 北西部に位置する調査区で、地山である12層で土坑や柱穴などの遺構を7基検出した。断面観察によって遺構面は2面あり、遺構1・2・4は10層に掘り込まれた遺構とわかった。全体的に遺物が少ないため、時期の判断は難しいが、第1遺構面は古代か中世、第2遺構面は弥生時代中期後葉と推測される。

No.188 中央西寄りに位置する調査区で、遺構は確認できなかったが、遺物を多く含む包含層を確認した。上層の暗褐色粘砂質土～にぶい黄褐色粘質土は鎌倉時代以降に堆積した層で、中層の礫混黒色粘土～褐色粘土+黒褐色粘土には奈良時代の遺物30が多く含まれていた。また、下層の黄褐色粘土+黒褐色粘土からは弥生時代終末期と思われる土器が出土し、下へと続いていた。

No.192 中央西寄りに位置する調査区で、灰黄褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を2基検出した。1基は調査区の半分以上の面積を占める底面が平らな落ち状の遺構で、深度は40cmを測る。埋土上層からは弥生時代後期～中世の遺物が出土し、二上山産サヌカイトの石礫も含まれていた。埋土下層には弥生時代中期末～終末期の遺物のみで、ミニチュア土器の鉢や他地域からの搬入品も出土した。

No.207 東端に位置する調査区で、黄褐色粘質土+灰黄褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を1基検出した。遺構は楕円～長方形を呈する大型柱穴で、深度は75cmを測り、中世の土師器や瓦・鉄製品などが出土した。また、この遺構面より下層には古代の遺物が多く含まれ、中でも丸底Ⅳ式の製塩土器を多く確認したため、地山であるにぶい黄褐色粘質土+灰黄褐色粘砂質土をベースにした奈良時代の遺構が周辺に存在する可能性がある。

No.208 北東部に位置する調査区で、地山である浅黄色粘質土+灰黄褐色粘砂質土をベースにした柱穴や小土坑などの遺構を4基検出した。遺構からの遺物は少ないが、古代と考えられる。

No.240 養宜館の北側の道路に面する調査区である。No.175と同様に、道路から垂直方向に1×4mの調査区を設定した。養宜館に関連する遺構は確認できなかったが、弥生時代後期後葉～終末期の遺物31を含む層や地山である礫混黒色粘質土に掘り込まれる柱穴を確認した。柱穴からは搬入品の器台が出土している。この遺構面の下には、これ以前に養宜川の影響を受けた礫層と砂層が厚く堆積していた。

No.259 中央部南に位置する調査区で、耕作土直下の黒色粘土に掘り込まれた柱穴などの遺構を4基検出した。遺構からは中世の遺物が出土している。

No.260 南東部に位置する調査区で、地山であるにぶい黄褐色粘質土+にぶい黄色粘質土に掘り込まれた遺構を5基検出した。遺構の埋土が異なることから直上の黄褐色粘土をベースにした遺構も含まれていた。古代頃の遺構と考えられる。

No.262 西部に位置し、養宜川沿いの調査区である。地山である礫混黒色粘質土をベースにした遺構を2基検出した。遺構から遺物は出土していないため、時期は不明である。

(F) 森ノ腰遺跡

森ノ腰遺跡は前年度の調査で遺跡範囲が確定していた。しかし、事業範囲が南に拡大されたため、No.

204とNo.205を追加した。調査の結果、僅かに遺物は含まれていたが、遺構は確認できなかった。

(G) 成壇寺跡

古代の瓦が散布することから、寺院跡として周知されている遺跡である。今までの調査で、淡路国分寺跡・国分遺跡（淡路国分寺瓦窯）・南辺寺古堂跡・志筑廃寺（淡路市）・宮林瓦窯（洲本市）と同范の瓦が出土している。

No.153 北東に位置する。礫混黒褐色粘質土をベースにした遺構を確認した。遺構から遺物は出土していないが、上層の暗褐色粘砂質土～黒褐色粘砂質土には中世、遺構面には弥生時代後期の遺物が含まれていた。

No.182 東端に位置する調査区で、地山である礫混暗褐色細砂質土に掘り込まれた埋土の異なる柱穴などの遺構を4基検出した。古代の遺物を含む柱穴や底部糸切りの上師器皿を含む中世の遺構が混在していた。

No.183 耕作土の下から20cm掘削した地点で、1mほどの巨石を2石と40cmほどの石を1石確認した。表面には礎石として使用された加工痕や柱を据えた痕跡は見られなかったが、現状保存を優先して石の裏面を確認していないことから、廃棄された礎石の可能性は捨てきれない。浅い土坑である遺構1（5～7層）からコンテナ1箱分以上の瓦が出土しているため、礎石であった場合は周辺に瓦葺きの礎石遺物が想定される。出土した瓦は、内面に布目痕が残る奈良時代後葉～平安時代の瓦32・33であったが、軒平・軒丸瓦は含まれていなかった。遺構2（8～10層）は大型の柱穴と考えられる。この調査区は遺構の切り合いが激しく、最終的に断面での確認となったが、11～13層は飛鳥時代前半の須恵器を含む土坑であった。

No.190 中央に位置する調査区で、耕作土直下で地山であるにぶい黄褐色砂質土に掘り込まれた土坑などの遺構を5基検出した。遺構出土の遺物から古代の遺構と考えられる。

No.195 南端に位置する調査区で、地山である礫混暗褐色粘質土に掘り込まれた柱穴などの遺構を3基検出した。遺構からの遺物は少なく、時代の判別は難しいが古代の可能性はある。

No.202 南西部に位置し、地山である礫混にぶい黄褐色砂質土に掘り込まれた柱穴などの遺構を4基検出した。遺構埋土は2種類あり、1基は弥生時代、残りの3基は古代以降と考えられる。

No.203 中央部に位置する調査区で、地山である礫混にぶい黄褐色砂質土に掘り込まれた遺構を3基確認した。切り合いが見られ、断面観察から2基の遺構は上層の礫混暗褐色粘砂質土をベースにした古代の遺構で、残りの1基は地山をベースにした弥生時代の浅い土坑であった。

No.209 中央部西端に位置する調査区で、北東隅でにぶい黄褐色粘砂質土～礫混にぶい黄褐色粘砂質土をベースにした土坑状の遺構を確認した。時期は不明である。

No.210 南部に位置する調査区で、暗褐色粘細砂質土～礫混褐色砂質土に掘り込まれた小穴を検出した。遺構から出土した遺物は少ないが、古代の可能性はある。

No.211 南部に位置する調査区で、地山である礫混にぶい黄褐色細砂質土～にぶい黄褐色粘砂質土に奈良時代後葉～平安時代の瓦が多く含まれていた。

No.217 中央部に位置する調査区で、耕作土直下で礫混暗褐色砂質土に掘り込まれた遺構を確認した。遺構から出土した遺物は小片のため時期は不明であるが、遺構面には須恵器が含まれることから、古代以降と思われる。

No. 225 中央部に位置し、耕作土直下で地山である7層に掘り込まれた土坑や柱穴などの遺構を3基検出した。遺構からは平安時代末～鎌倉時代の暗花蓮華文の白磁34を含む輸入陶磁器や底部系切りの土師器皿が出土し、遺構3には底部系切りの土師器皿35～37が多く含まれていた。

No. 226 中央部に位置し、遺構面を2面確認した。第1遺構面では飛鳥時代の遺物38を多く含む黒褐色粘質土+にぶい黄褐色粘砂質土に掘り込まれた奈良時代の柱穴を確認した。第2遺構面では地山である褐色粘砂質土に掘り込まれた飛鳥時代の柱穴と弥生時代後期末～終末期の遺物39を含む竪穴住居を検出した。竪穴住居は調査区の半分の面積に引っ掛かっていたが、全体の形状は不明である。南東隅に焼土層を確認したが、支柱穴は検出していない。

No. 227 中央部に位置する調査区で、耕作土直下の黒褐色粘質土+にぶい黄褐色粘砂質土に掘り込まれた遺構を3基検出し、奈良時代と思われる遺物が出土した。遺構面には弥生時代後期後半の遺物が含まれていることから、地山である礫混暗褐色粘砂質土をベースにした遺構が周辺で確認される可能性がある。

No. 235 南部に位置する調査区で、地山である礫混暗褐色粘砂質土をベースにした土坑や柱穴などの遺構を6基検出した。遺構埋土は2種類あり、切り合いも見られたが、時期差はあまりないと考えられる。遺構からは鎌倉時代の遺物が出土している。

No. 237 南部に位置する調査区で、暗褐色粘質土に掘り込まれた柱穴などの遺構を7基検出した。埋土は大きく3種類に分けられるが、時期は不明である。

No. 238 南端に位置する調査区で、地山である礫混にぶい黄褐色粘細砂質土をベースにした土坑や小穴などの遺構を9基検出した。埋土は5種類に分けられるが、時期は不明である。

No. 242 南端に位置する調査区で、地山であるにぶい黄褐色砂質土～礫混褐色粘砂質土をベースにした遺構を2基検出した。遺構から弥生時代の遺物が出土している。

No. 243 南西端に位置する調査区で、黒褐色粘質土～礫混黒褐色粘質土に掘り込まれた中世の遺構を確認した。また、遺構面には中世の遺物が含まれていたことから、地山である礫混暗褐色粘砂質土をベースとした遺構が周辺で確認される可能性がある。

No. 249 中央部東に位置する調査区で、地山である7層に掘り込まれた遺構を6基検出したが、遺構6以外は耕作土直下の4層に掘り込まれた室町時代の遺構であった。室町時代の遺構には切り合いが見られることから、多少の時期差があったものと考えられ、遺構4からは瀬戸天目茶碗が出土している。遺構6は浅い土坑で、弥生時代後期末～終末期の遺物が出土している。

No. 250 中央部に位置する調査区で、遺構面を3面検出した。第1遺構面は5層をベースとし、土坑など4基の遺構を検出した。遺構2はやや検出面が低かったため平面ではあまり残っていなかったが、断面の3・4層に対応する大きい土坑である。遺構からは中世の底部系切り土師器皿の他に弥生時代～古代の遺物が出土している。第2遺構面は6層をベースにした遺構5を確認したが、時期は不明である。第3遺構面では調査区全体が竪穴住居の中に入っており、7層以下が住居埋土となる。この住居は火災で焼け落ちた焼失住居であり、何本かの柱材が炭となって残っていた。住居埋土からは弥生時代後期後半～終末期の遺物が出土し、搬入品や両面に使用痕のある石皿も含まれている。11層にはまだ遺物が見られたことから、住居埋土は下に続いていた可能性が考えられる。また、遺構6は7層に掘り込まれた遺構で飛鳥時代前半の須恵器が出土した。3～5層の出土遺物の中には平安時代の緑釉陶器が含まれていた。

№ 254 中央部東端に位置する調査区で、耕作土直下で地山である礫混黒褐色砂質土に掘り込まれた遺構を1基検出した。遺物が小片のため、時期は不明である。

№ 255 南東端に位置する調査区で、地山である暗褐色粘砂質土～礫混暗褐色粘質土に掘り込まれた遺構を3基検出した。おそらく古代の遺構と思われる。

№ 261 中央部に位置する調査区で、地山であるにぶい黄褐色砂質土～礫混褐色粘砂質土をベースにした弥生時代後期前半の遺構を2基検出した。遺構2から北淡路地域の土器も出土している。

(H) 養宜上長手遺跡

№ 229 耕作土直下の6層に掘り込まれた遺構を3基確認した。遺構1からは鎌倉時代の底部系切の土師器皿が多く出土した。また、6層には遺物が含まれていたことから、周辺に7層をベースにした遺構の存在も考えられる。

№ 230 地山である褐色シルト質土に掘り込まれた小穴を検出した。遺物が少ないため明確ではないが、中世と考えられる。

№ 232 にぶい黄褐色粘質土に掘り込まれた遺構を確認した。遺物は少量で時代は明確ではないが、上層の褐色粘砂質土+灰黄褐色砂質土に輸入陶磁器が含まれることや周辺の遺構の時期から中世の範疇と考えられる。

2. まとめ

調査の結果、広範囲において埋蔵文化財の包蔵が確認された。周知の遺跡である入田稲荷前遺跡・南畑遺跡・戒壇寺跡は包蔵地の範囲が拡大し、前年度に発見された姥畑遺跡・喜平前遺跡・荒目遺跡・森ノ腰遺跡については遺跡範囲が確定し、新たに養宜上長手遺跡も発見された。遺跡ごとに時代に沿ってまとめる。

(A) 入田稲荷前遺跡

入田稲荷前遺跡は縄文（前期・中期・後期）・弥生（中期前葉・中期後葉・後期～終末期）・飛鳥・奈良・平安初頭・鎌倉・室町時代の遺跡である。

縄文時代の範囲は①中央部南の狭い範囲と②南端部に限定される。時期も①は後期前葉、②は前期前葉と中期末に分かれていることから、一時的な生活の跡が点在しているものと思われる。№ 74 出土の前期前葉の土器は生駒西麓産であり、石器の材料である二上山のサヌカイトとともに河内地域からもたらされたものと考えられる。

弥生時代は大きく3つの範囲に分けられ、①北部と②中部の狭い範囲、③遺跡の南半全域である。時期は中期後葉～終末期の遺構が広範囲に広がっていたが、前期と中期中葉については皆無であった。弥生時代中期前葉については、今回調査を行った事業範囲の中で唯一南部に位置する№ 147 のみ確認されている。①については養宜川の氾濫原にあたり、上流部の遺構が削られて流れ込んだものと考えられる。居住域は③の範囲で、竪穴住居などが確認されている。また、北部の№ 141 で中世の包含層から出土した貨泉3枚は弥生時代の遺構からの流れ込みであったが、当時の貴重品であったことは間違いなく、この地域だけでなく淡路島の弥生社会の流通を考える上で重要な資料となった。

古墳時代の遺構・遺物は確認できなかった。

北部で飛鳥時代の包含層を確認している。この時期の範囲はもう少し広がる可能性がある。

古代の遺構・遺物はほぼ遺跡全域に広がり、奈良～平安時代初頭が大半である。中でも中央部に位置する№112では古瓦がややまとまって出土していることから、周辺に官衙や寺院の存在を示唆している。また、南部に位置する№64では衣服令が六位以下(国司)の役人が身に着ける青銅製帯金具の蛇尾片や畿内産土師器が出土し、遺構も大型の柱穴を確認していることから、官衙の要素が高い地域と言える。

中世は①中央北寄り、②中央南寄り、③南端部の3つの範囲で確認した。ほとんどが鎌倉時代の遺構・遺物であり、室町時代に衰退していき、現在も民家は存在しない。

(B) 姥畑遺跡

縄文後期・弥生(後期・終末期)・古墳初頭・飛鳥・奈良・平安初頭・鎌倉・室町時代の遺跡である。

縄文時代は遺物のみであるが、北部に位置する№198・234から出土している。事業範囲で後期の遺構が確認されているのは対岸の入田稻荷前遺跡№148のみであることから、その周辺から流れ込みと推測される。弥生時代は大きく①北部と②南部の2つの範囲で確認されている。①の北部に位置する厚い堆積層を確認した№170・171では、事業範囲内では成壇寺跡の2ヶ所でしか確認されていない古墳時代初頭までの遺物が出土した。河内地方や阿波地方の搬入品や北近畿の影響を受けた土器などが多く含まれ、交流や交易が盛んであったことを物語っている。②では竪穴住居が確認され、居住城であったと考えられる。

飛鳥時代は①北端部と②南端部の狭い範囲で遺物が確認されている。

古代は入田稻荷前遺跡同様に奈良～平安時代初頭の遺構・遺物が遺跡全域に広がっている。

中世は①北端部と②南部の範囲で確認した。鎌倉時代が中心と考えられるが、①の№234では室町時代の遺構も確認されている。

(C) 喜平前遺跡

弥生(後期・終末期)・飛鳥・奈良・鎌倉・室町時代の遺跡である。

弥生時代の遺構・遺物は遺跡の東部の狭い範囲で確認した。周辺に小規模な集落が営まれていたと推測する。

飛鳥時代は遺跡の中央部に範囲を持つ。№212では終末期古墳などで副葬品として出土することが多いタイプの須恵器の甕や坏が見られた。北側に位置する上八木古墳からの流れ込みとも考えられる。また、製塩土器の丸底IV式の中でも器壁の薄いIV a式が多く出土した。

古代は全域に広がり、須恵器の長頸壺などがやや官衙的な遺物が出土している。

中世もほぼ全域に広がり、鎌倉～室町時代の遺構・遺物が見られる。守護大名の居館で政庁も兼ねていた養宜館の北側に位置し、東には城の山城跡が隣接するこの地には、家臣の名前と思われる喜平の名が付く「喜平土井」や「喜平前」の小子が残る。

(D) 南畑遺跡

周知の遺跡である南畑遺跡と成壇寺跡の周辺一帯を調査したことにより、2つの遺跡の境界が無くなってしまった。どちらか1つの遺跡として名称変更することも可能であったが、南畑遺跡は縄文時代前期の遺跡として、そして成壇寺跡は古代の寺院跡として定着していたため、遺構や遺物の特質を捉え

て、境界を定めた。南畑遺跡は縄文時代の石器が多く採集され、古代の遺物・遺構が見られない範囲とし、戒壇寺跡は古代の遺構・遺物が広がる範囲とした。

南畑遺跡は縄文（前期）・弥生（後期・終末期）・中世の遺跡である。

縄文時代の範囲は遺跡のほぼ全域にあたり、田圃の表面には石器やササカイト片が多く見られるわりに、遺構はNo.223 でしか確認できていない。遺構や包含層が削られたことによって耕作土に石炭やササカイト片が散布しているならば、ある程度散見するはずの土器が見られず、整合性がとれていないことから、今後の調査によって解明されることを期待する。

弥生時代は遺跡の西半に広がり、戒壇寺跡にも続いている。

中世は東部に広がり、戒壇寺跡の一部またがる。時期は遺物が少なく、明確ではない。

(E) 荒目遺跡

弥生（中期後葉・後期・終末期）・奈良・平安初頭・鎌倉・室町時代の遺跡である。

弥生時代は①西半のほぼ全域と②東部に細長い帯状に広がる。事業範囲の中で比較的中期後葉の遺構・遺物が見つっている。①では中期後葉～終末期の遺構・遺物が全域に見られるが、明確な竪穴住居は確認できていない。おそらく、現在の集落が微高地にあたることから、弥生時代においても居住域であったと推測される。②は中期後葉～後期に限られ、養宜川の旧河道であったNo.126・129 に多くの遺物が含まれていた。

古代は①中央部の広範囲と②北東端と③南東端で確認されている。いずれも奈良時代～平安時代初頭と思われる。

中世は①西半全域、②中央部と③東端は狭い範囲で確認されている。①では養宜館周辺に濠を確認するためのトレンチを入れた。特に養宜館東側のNo.139・175は小字が「東堀」であったが、濠らしきものは確認できなかった。①の西半の養宜館周辺では室町時代、東半では鎌倉時代の遺物が多い傾向にあった。養宜館に関連する家臣団の邸宅などと推測される。②③については詳細な時代までは不明である。

(F) 森ノ腰遺跡

養宜川右岸の狭小な弥生時代中期後葉の遺跡である。養宜川へと流れる溝のみを確認している。

(G) 戒壇寺跡

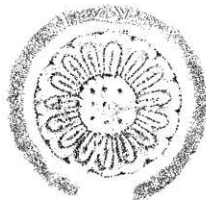
弥生（後期・終末期）・古墳初頭・飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町時代の遺跡である。

弥生時代の範囲は南畑遺跡から続き、遺跡の西半に広がる。遺跡の中心に位置するNo.226・250で竪穴住居を確認したことから、この周辺に居住域が展開していたものと考えられる。No.89は弥生時代後期～古墳時代初頭までの厚い包含層が堆積し、碧玉製管玉や搬入土器などが出土した。古墳時代初頭まで継続するのは、この遺跡ではここだけであった。

飛鳥時代は中央部の①北側と②南側に狭い範囲で確認されている。

古代はほぼ全域で確認されている。奈良時代前半はあまり見られず、奈良時代後半～平安時代の遺構が多い。寺院跡を示す明確な遺構は確認できなかったが、「戒旦寺」という小字名が付く一帯に設定したNo.183・211で瓦が見つかり、字名と出土遺物が合致した。今回の調査では軒丸や軒平瓦は出土して

いないが、地元住民の方から昔に採集したほぼ完形の軒丸瓦の瓦当を寄贈いただいた。出土地はNo.261の東、No.251の南に接する元々桑畑であった田圃から出土した瓦であることを聞き取った。単弁十五弁蓮華文軒丸瓦で、淡路国分寺 SKM03 型式・国分遺跡 SBM03 型式と同范品である。この形式は十六弁で推定復元されていたが、寄贈品により、十五弁であることが判明した。時期は奈良時代後半頃と思われる。戒壇寺跡は瓦が多く出土する南部に存在したものと考える。平安時代の特記事項としては、中央より北寄りのNo.94・250から緑釉陶器が出土していることである。緑釉陶器は一般の集落で出土することは珍しく、官衙や有力者の邸宅から出土する高級品であることから、この地域にこれらの建物が存在したと推測される。中世に入ると遺跡の南半部全域に鎌倉～室町時代の遺構・遺物が見られ、養宜館に関連するものと思われる。



単弁十五弁蓮華文軒丸瓦

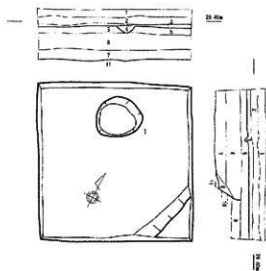
(H) 養宜上長手遺跡

今回の調査で新たに発見された鎌倉～室町時代の遺跡である。事業範囲のほぼ全域が遺跡範囲となり、おそらく広範囲に広がっていると考えられる。古代以前の遺物は見られないことから、中世以降に拓かれた地域と考えられる。

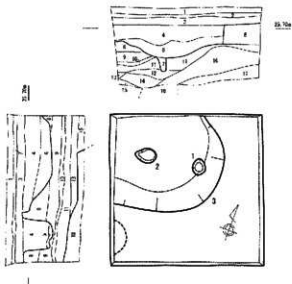
以上のことから、今回の事業範囲全体をまとめると、まず縄文時代前期に南畑遺跡と入田稲荷前遺跡の南端部で活動の痕跡が確認できる。そして縄文時代中期～後期にかけてはかなり断続的ではあるが、入田稲荷前遺跡でわずかに見つかっている。縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構と遺物は、現段階では未確認である。弥生時代中期中葉に入田稲荷前遺跡の極一部で確認されるが中期中葉には続かない。中期後葉になると、荒日遺跡を中心として入田稲荷前遺跡や森ノ腰でも展開しはじめる。後期には姥知遺跡・喜平前遺跡・南畑遺跡・戒壇寺跡へと拡大し、終末期まで継続する。古墳時代初頭まで遺物を確認できたのは、姥知遺跡と戒壇寺跡の極狭い範囲で、その他は一度完全に断絶する。再び人々が活動しはじめるのが養宜川右岸の河岸段丘上に群集墳が築かれ出す7世紀の飛鳥時代であり、その間約350年ほど生活の痕跡は確認できない。飛鳥時代は入田稲荷前遺跡・姥知遺跡・喜平前遺跡・戒壇寺跡で確認されるが、あまり広範囲ではない。奈良時代に入ると南畑遺跡・森ノ腰遺跡・養宜上長手遺跡以外の遺跡で広範囲に展開する。養宜地区全体で考えると、この時期が一番栄えていたものと思われる。平安時代も後半になると全体的に衰退傾向にあり、入田稲荷前遺跡・姥知遺跡では一旦断絶する。鎌倉時代になると森ノ腰遺跡以外、主に養宜館周辺で再び展開し始め、室町時代まで継続していたようである。

事業範囲は市内でも多くの遺跡が密集する地域であることがわかった。どの遺跡も遺構密度が高く、出土遺物から考えても歴史的に重要な地域であったと思われる。詳細な調査が行われることで、新たな歴史が紐解かれるであろう。

(的崎)



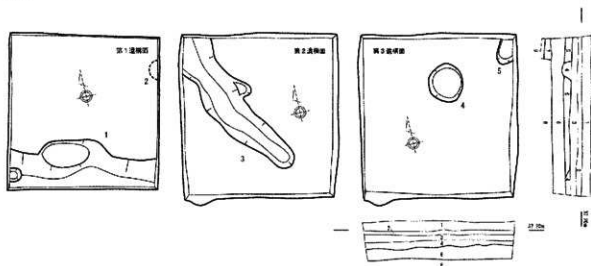
1. 高気褐色10P15/2粘砂質土+黄褐色10P16/4粘砂質土(遺物含む)
2. 黄褐色10P16/4粘砂土+紅土質褐色10P16/4粘砂質土(遺物含む)
3. 紅土質褐色10P16/3シルト質土(赤)・遺物含む
4. 紅土質褐色10P16/2シルト質土(赤)・φ5cm以下層・盛り継ぎばらに含む
5. 高気褐色10P15/2粘砂土+紅土質褐色10P16/3粘砂質土(赤)多く・遺物多く含む
6. 高気褐色10P15/2粘砂質土(赤)・遺物・φ5cm以下層・盛り継ぎばらに含む
7. 高気褐色10P15/2粘砂質土(赤)・遺物・φ5cm以下層・盛り継ぎばらに含む
8. 7層→φ層+10層
9. 紅土質褐色10P16/3粘砂質土
10. 褐色10P16/4粘砂土
11. 黄褐色10P16/4粘砂質土(φ20cm以下層・盛り継ぎばらに含む)



1. 紅土質褐色10P16/2粘砂質土+紅土質褐色10P16/4粘砂質土(遺物含む)
2. 褐色10P16/4粘砂土+紅土質褐色10P16/2粘砂質土(遺物含む)
3. 紅土質褐色10P16/3粘砂土+褐色10P16/4粘砂土(赤)・遺物含む
4. 紅土質褐色10P16/3粘砂土+褐色10P16/4粘砂土(赤)・遺物含む
5. 紅土質褐色10P16/2粘砂土+褐色10P16/4粘砂土(赤)・遺物含む
6. 4層に7層並ぶ(赤)・遺物含む
7. 紅土質褐色10P16/2粘砂質土(赤)含む
8. 黄褐色10P16/3粘砂土+褐色10P16/4粘砂土(遺物含む)
9. 黄褐色10P16/3粘砂土+褐色10P16/4粘砂土
10. 紅土質褐色10P16/4粘砂土(赤)含む
11. 紅土質褐色10P16/3粘砂土(遺物含む)
12. 紅土質褐色10P16/3粘砂土
13. 紅土質褐色10P16/4粘砂土
14. 黄褐色10P16/4+褐色褐色10P16/3粘砂土(遺物)・φ5cm以下層・盛り継ぎ含む
15. 紅土質褐色10P16/3粘砂土
16. 黄褐色10P16/4粘砂土(遺物)・φ10cm以下層・盛り継ぎ多く含む
17. 褐色10P16/4粘砂土(遺物)・φ10cm以下層・盛り継ぎ多く含む
18. 黄褐色10P16/4粘砂土+褐色褐色10P16/3粘砂土(遺物)・φ20cm以下層・盛り継ぎ多く含む

(C) 喜平前遺跡

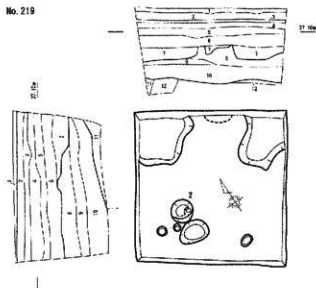
No. 212



1. 紅土質褐色10P15/2粘砂質土+黄褐色10P16/4粘砂質土(遺物含む)
2. 黄褐色10P16/4粘砂質土(赤)含む(赤)・遺物含む
3. 反砂褐色10P16/2粘砂質土(赤)多く・赤・遺物含む
4. 反砂褐色10P16/3粘砂質土(赤)・遺物含む
5. 紅土質褐色10P16/2粘砂質土(赤)・赤・遺物含む
6. 高気褐色10P15/2粘砂質土(赤)・遺物含む
7. 黄褐色10P16/2粘砂質土
8. 高気褐色10P15/2粘砂質土(φ30cm以下層・盛り継ぎ含む(赤)含む)
9. 黄褐色10P16/3粘砂土(φ15cm以下層・盛り継ぎ多く含む)

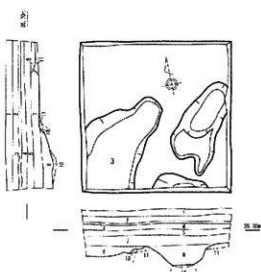
調査区断面図・平面図 2

No. 219



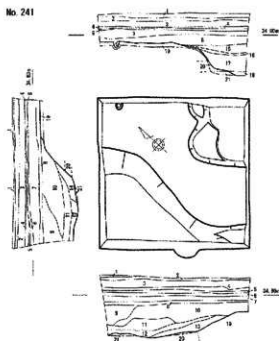
1. 灰黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
2. 土色黄褐色10P5/4粘砂質土+灰黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下、散り雜草含む)
3. 黄褐色10P5/4粘砂質土(遺物含む)
4. 灰黄褐色10P5/4粘砂質土(遺物含む)
5. 土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
6. 土色黄褐色10P5/2粘砂質土
7. 砂褐色10P5/2粘砂質土(遺物、 ϕ 10cm以下、金目雜草含む)
8. 暗褐色10P2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 10cm以下、散り雜草含む)
9. 暗褐色10P2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下、散り雜草含む)
10. 暗褐色10P2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 10cm以下、散り雜草含む)
11. 土色黄褐色10P4/2粘砂質土(ϕ 5cm以下、散り雜草含む)
12. 暗褐色10P5/4粘砂質土(ϕ 10cm以下、散り雜草含む)

No. 221



1. 黄褐色10P5/4粘砂質土+土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
2. 灰黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
3. 黄褐色10P5/4粘砂質土(遺物含む)
4. 灰黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
5. 土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
6. 暗褐色10P2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下、金目雜草含む)
7. 黄褐色10P5/4粘砂質土+灰黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
8. 灰黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
9. 土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
10. 暗褐色10P2/2粘砂質土+灰黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
11. 灰黄褐色10P4/2粘砂質土+灰黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
12. 暗褐色10P2/2粘砂質土(ϕ 10cm以下、散り雜草含む)

No. 241

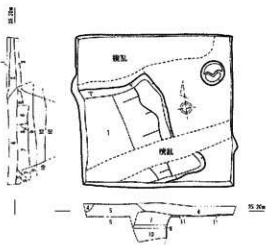


1. 礫物土
2. 黄褐色10P4/4粘砂質土+土色黄褐色10P4/4粘砂質土(遺物含む)
3. 土色黄褐色10P4/4粘砂質土+黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
4. 黄褐色10P5/2粘砂質土+土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
5. 土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
6. 黄褐色10P4/4粘砂質土+灰黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
7. 黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
8. 土色黄褐色10P4/4粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下、散り雜草含む)
9. 黄褐色10P5/2粘砂質土+土色黄褐色10P4/4粘砂質土(遺物含む)
10. 土色黄褐色10P4/4粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下、散り雜草含む)
11. 暗褐色10P2/2粘砂質土+黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
12. 暗褐色10P2/2粘砂質土+土色黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
13. 暗褐色10P2/2粘砂質土+土色黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
14. 暗褐色10P2/2粘砂質土+土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
15. 土色黄褐色10P4/4粘砂質土(遺物含む)
16. 暗褐色10P2/2粘砂質土(遺物含む)
17. 土色黄褐色10P4/4粘砂質土+土色黄褐色10P4/2粘砂質土(遺物含む)
18. 暗褐色10P2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下、散り雜草含む)
19. 土色黄褐色10P4/4粘砂質土(遺物含む)
20. 土色黄褐色10P5/2粘砂質土(遺物含む)
21. 暗褐色10P2/2粘砂質土(ϕ 10cm以下、散り雜草含む)

調査区断面図・平面図 3

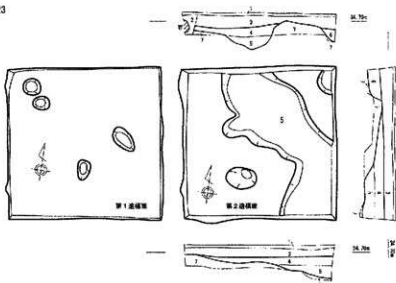
(D) 南畑遺跡

No. 201



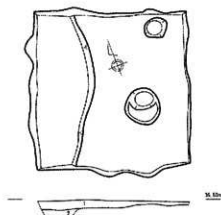
1. 灰土層色1076/2.5の質土(遺物含む)
2. 1層+1層(埋込、遺物含む)
3. 埋込層色1076/4土(埋込、φ20cm以下くさむ)
4. 1層+7層+8層(埋込、遺物含む)
5. 1層+7層+8層(埋込、遺物含む)
6. 灰土層色1076/2の質土
7. にがい質褐色1076/3の質土+3層ブロック(遺物含む)
8. にがい質褐色1076/4の質土+ブロック
9. 黒褐色1076/2の質土(遺物、φ5cm以下層、盛り跡わずかに含む)
10. 埋込層褐色1076/5の粘砂質土(遺物、φ10cm以下層、盛り跡含む)
11. にがい質褐色1076/4の質土+2にがい質褐色1076/3の質土

No. 223



1. 灰土層色1076/2の質土(土2層)
2. 埋込にがい質褐色1076/3土(埋込、φ10cm以下層、盛り跡含む)
3. 埋込褐色1076/5の粘砂質土+埋込褐色1076/5/3の粘砂質土(遺物、φ5cm以下層、盛り跡水びらを含む)
4. 褐色粘砂質粘砂質土(遺物、遺物含む)
5. にがい質褐色1076/2.5の質土(遺物、遺物、φ5cm以下層、盛り跡水びらを含む)
6. にがい質褐色1076/3.5の粘砂質土(遺物、遺物、φ5cm以下層、盛り跡水びらを含む)
7. 埋込褐色1076/4粘砂質土(φ10cm以下層、盛り跡含む)

No. 256



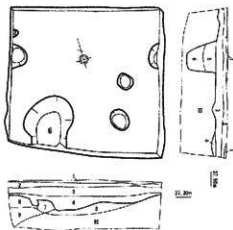
1. 黒色1076/7粘砂質土(遺物、φ20cm以下層、盛り跡水びらを含む)
2. 埋込褐色1076/1粘砂質土(φ30cm以下層、盛り跡多C含む)



調査区断面図・平面図 4

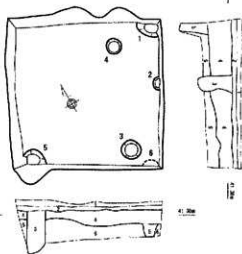
(E) 菅谷遺跡

No. 154



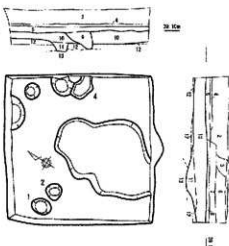
1. 構内土
2. 褐色10P6/粘砂質土+にぶい黄褐色10P6/粘砂質土 (遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む)
3. 灰黄褐色10P4/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層までばらに含む
4. 黄褐色10P2 5/2粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層までばらに含む
5. 黄褐色10P2/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層までばらに含む
6. 黄褐色10P2 5/2 粘砂質シルト (遺物・φ30cm下層までばらに含む)
7. 灰色10P1 7/粘質土
8. 黄褐色10P2/粘質土
9. 黄褐色10P2/粘質シルト
10. 暗灰褐色10P7/粘質シルト (φ15cm以下層・裏り跡多く含む)

No. 156



1. 暗褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
2. 黄褐色10P2/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
3. 黄褐色10P2/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
4. 灰色10P1/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
5. 灰色10P1 7/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
6. 暗黄褐色10P1 7/粘質土 (φ30cm下層・裏り跡多く含む)

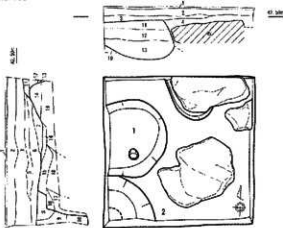
No. 157



1. 構内土
2. 暗黄褐色7 6P4/粘質土 (遺物・近代土・遺物を含む)
3. 灰黄褐色10P6/粘砂質土 (遺物・φ30cm以下層を含む)
4. 黄褐色1 5P1/粘砂質土
5. 褐色10P6/粘砂質土
6. 黄褐色10P6/粘砂質土+にぶい黄褐色10P5/粘砂質土 (遺物を含む)
7. にぶい黄褐色10P5/粘砂質土塊・遺物を含む
8. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物を含む
9. 暗褐色10P2/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
10. 暗灰褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
11. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
12. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土
13. 暗灰褐色10P6/粘砂質土 (φ15cm以下層・裏り跡を含む)

(G) 成煙寺跡

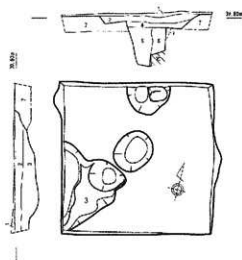
No. 153



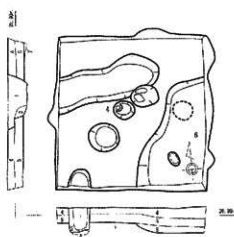
1. 構内土
2. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
3. 暗黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
4. 黄褐色10P2/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
5. 黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
6. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
7. 褐色10P6/粘砂質土塊 (遺物を含む)
8. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土塊 (遺物を含む)
9. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
10. 暗褐色10P2 5/2粘砂質土塊・遺物・φ30cm下層・裏り跡多量に含む
11. 黄色10P2/粘砂質土に厚み不均等に混ざる (遺物を含む)
12. 黄褐色10P2/粘砂質土塊 (遺物を含む)
13. 暗褐色10P2/粘砂質土塊 (遺物を含む)
14. 暗褐色10P2/粘砂質土塊 (遺物を含む)
15. にぶい黄褐色10P6/粘砂質土
16. 暗黄褐色10P6 5/粘砂質土 (φ30cm下層・裏り跡を含む)
17. にぶい黄褐色10P6 5/3 粘砂質土 (φ30cm下層・裏り跡多量に含む)
18. 褐色10P6/粘砂質土
19. 褐色10P6 5/粘砂質土

0 (50/50) 2m

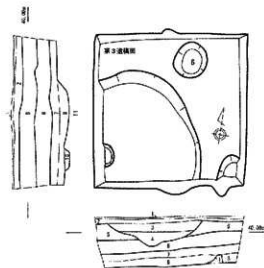
調査区断面図・平面図 5



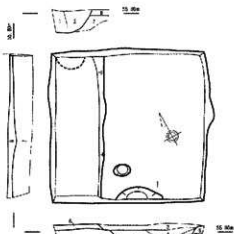
- 1 黏土
- 2 暗褐色10R2/2粘砂質土(灰質、遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 3 比土1黄褐色10R4/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 4 暗褐色10R2/2粘砂質土(灰、遺物等)
- 5 比土1黄褐色10R4/2粘砂質土(灰、遺物、 ϕ 10cm以下層、裏り層または土心)
- 6 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 10cm以下層、裏り層等)
- 7 暗褐色10R2/2粘砂質土(ϕ 20cm以下層、裏り層または土心)



- 1 灰黄褐色10R6/2粘質土(遺物等)
- 2 比土1黄褐色10R4/2粘砂質土(遺物等)
- 3 ϕ 5以下層
- 4 灰黄褐色10R6/2粘質土-5層(灰、遺物等)
- 5 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物等)
- 6 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物等)
- 7 比土1黄褐色10R4/2粘砂質土(ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)



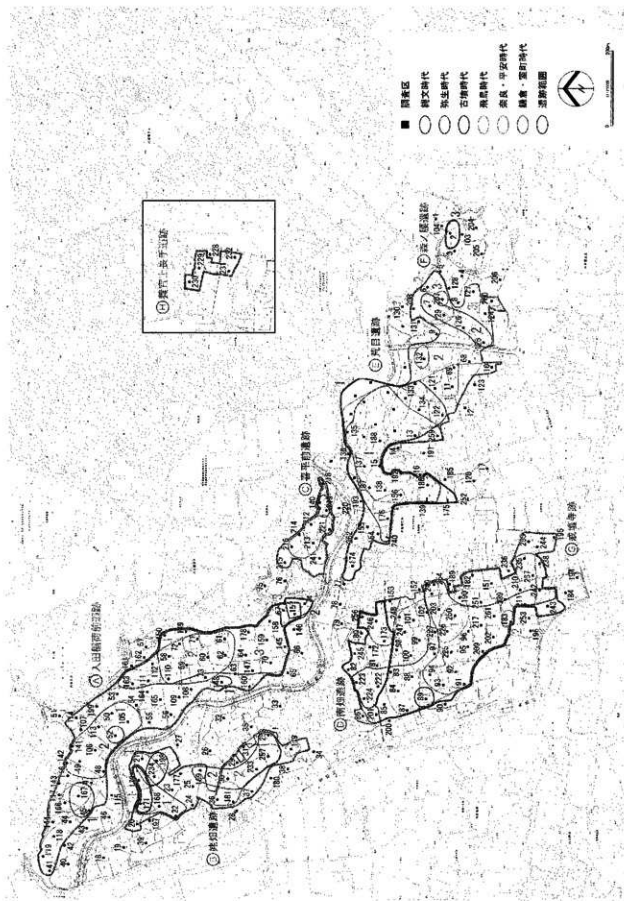
- 1 粘土
- 2 灰黄褐色10R6/2粘砂質土(灰、遺物等)
- 3 比土1黄褐色10R4/2粘質土(遺物等)
- 4 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物等)
- 5 黄褐色10R4/2粘砂質土(灰、遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 6 暗褐色10R2/2粘砂質土+暗褐色10R2/2粘砂質土(灰、遺物、 ϕ 10cm以下層、裏り層等)
- 7 暗褐色10R2/2粘砂質土+暗褐色10R2/2粘砂質土(灰、遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 8 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層等)
- 9 暗褐色10R2/2粘砂質土(灰、遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層等)
- 10 暗褐色10R2/2粘砂質土(灰、遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層等)
- 11 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層等)



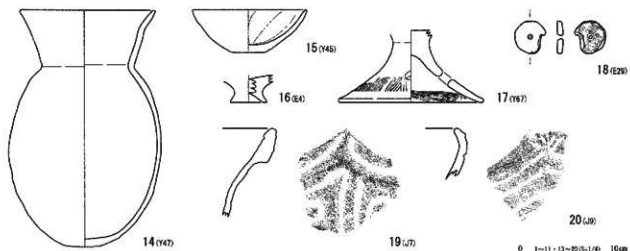
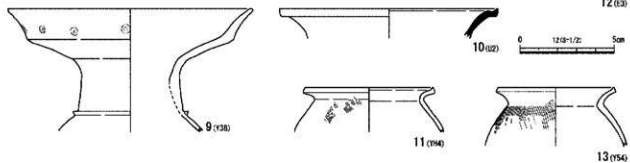
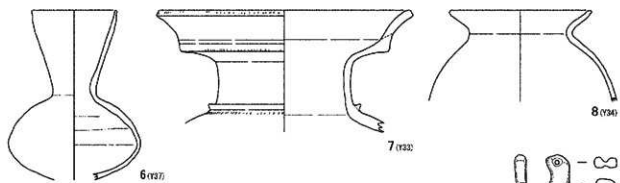
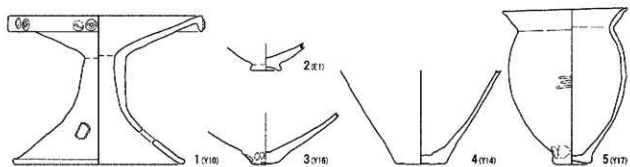
- 1 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 2 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層等)
- 3 灰黄褐色10R6/2粘砂質土+4層(遺物等)
- 4 暗褐色10R2/2粘質土(遺物等、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 5 暗褐色10R2/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層等)
- 6 黄褐色10R4/2粘砂質土(遺物、 ϕ 5cm以下層、裏り層または土心)
- 7 暗褐色10R2/2粘質土(ϕ 20cm以下層、裏り層または土心)

0 5(=1/50) 2m

調査区断面図・平面図 6

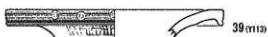
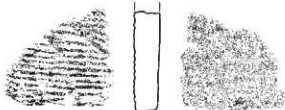
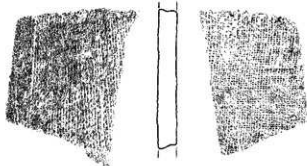
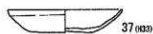
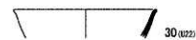
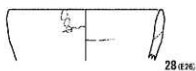
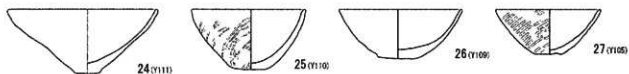
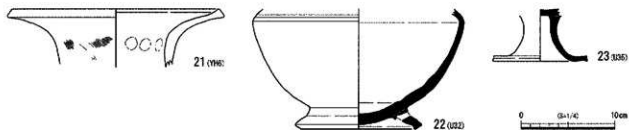


遺跡時代別範圍圖



1 ~ 9 No.163 10 No.166 11 No.178 12 ~ 17 No.170 18 No.233 19 - 20 No.234

出土遺物 1



21 No.258 22・23 No.212 24～27 No.219 28 No.221 29 No.241
30 No.188 31 No.240 32・33 No.183 34～37 No.225 38・39 No.226

出土遺物 2

4. 中筋古城跡 - 2次調査 -

所在地 広田中筋字杭田 824-1
 事業名 民間宅地造成事業
 担当者 山崎裕司
 種別 立会調査
 調査期間 平成 29年 6月 5日
 調査面積 15 m² (1 × 15 m)



調査の位置

1. 調査内容

調査地は初尾川によって形成された段丘の下に位置し、標高 35 m を測る。

中筋古城跡は江戸時代末期の地誌『味地草』に中筋古城跡として記載され、調査対象地東側の段丘上に鎮座する愛宕神社に該当すると考えられている。

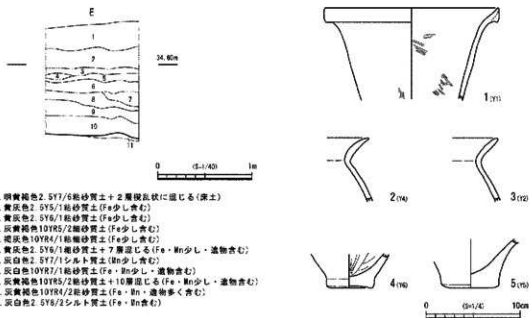
愛宕神社北西の耕地に宅地造成事業が計画されたことを受け、平成 29年 1月 17日に確認調査を行い、弥生時代後期～鎌倉時代の遺物が出土した。その結果を受け、下水道配管の部分について立会調査を行うことになった。

その結果、地表から 0.6 ～ 1.2 m 下で弥生時代後期の遺物を含む遺物包含層を確認した。粘質あるいはシルト質の厚い堆積土が確認され、流水の影響を受けたと思われる。

2. まとめ

中筋古城跡に関する遺構や遺物は確認できなかったが、弥生時代後期の遺物包含層を確認した。調査地は流水の影響を受けており、東～南側の段丘上に集落が展開し、そこからの流れ込みと推定される。

(山崎)



層序図・出土遺物 (6～10層)

5. 門の上遺跡・南平・海田遺跡 - 1次調査 - - ハバ古墳 - 2次調査 -

所在地 志知北字大床・志知南字北浦外
 事業名 経営体育成基盤整備事業（片田地区）
 担当者 山崎裕司
 種別 確認調査
 調査期間 平成29年8月21日～12月18日
 調査面積 709㎡（2×2㎡168ヶ、2×5㎡1ヶ、
 1×14㎡1ヶ、1×13㎡1ヶ）



調査の位置

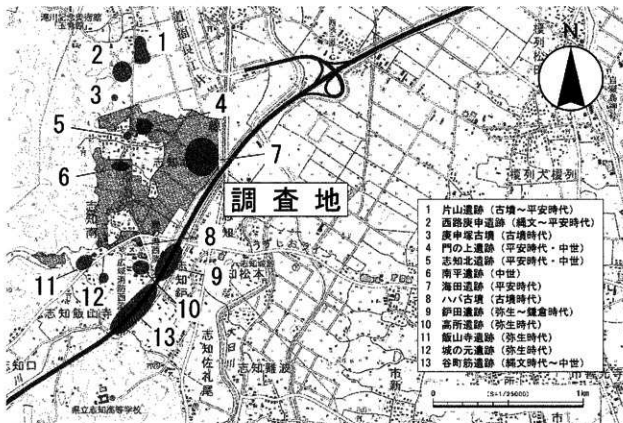
1. 調査内容

調査地は三原平野の北西部に位置し、南辺寺山系山裾の高低差の大きな丘陵部と、大日川支流新川周辺の低平な平野部からなる。平野部にはN30°Eの条里型地割が見られる。

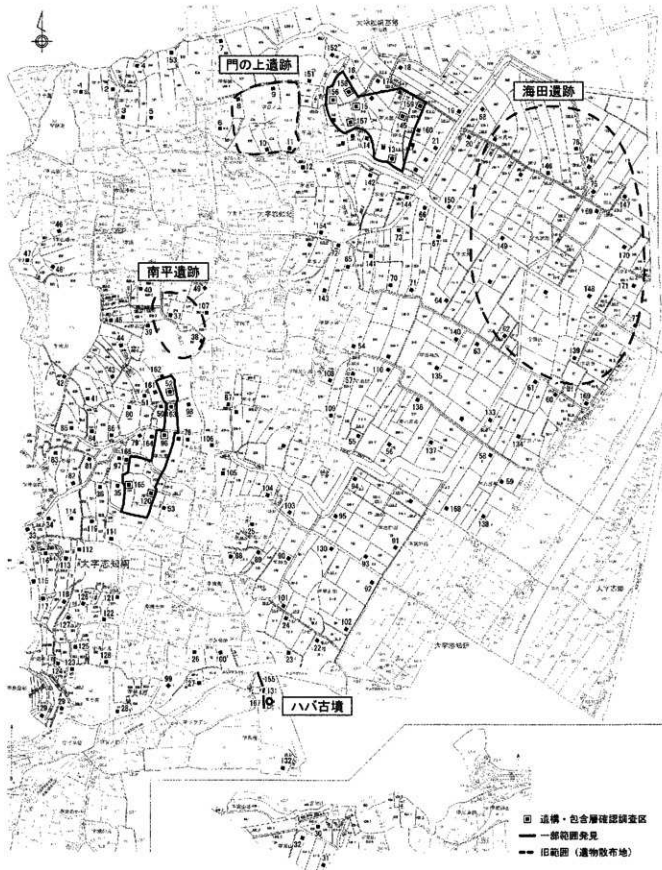
事業地の範囲内には、周知の遺跡として、門の上・南平・海田遺跡およびハバ古墳が含まれる。ハバ古墳は昭和60年度の農地改良工事中に、玄室底面の敷石が発見された。記録保存後、敷石を外して工事が行われ、現存はしていない。玄室底面の大きさは淡路島で最大である。

志知北と志知南を含む片田地区で行われる県営圃場整備事業に伴い確認調査を行った。

№.13 東西方向の直線的な溝を検出した。時代は不明であるが、埋土から土師器・須恵器片が出土した。



周辺の遺跡



調査区設定図

No. 15 2～4層から平安時代末～鎌倉時代頃と思われる底部系切の土師器皿1・小皿2・瓦器碗3が出土した。

No. 52 地山となる5層上面で中世と思われる柱穴を検出した。柱穴2からは室町時代頃と思われる土師器皿4・小皿5が出土した。

No. 96 4層から室町時代頃の土師器皿6・7・8が出土した。

No. 120 3～5層から室町時代頃の須恵器坏9が出土した。

No. 145 3層から律令期と思われる須恵器坏10・皿11・土製煮炊具12が出土した。

No. 156 4層から平安時代末～鎌倉時代頃と思われる底部系切の土師器皿13・小皿14・白磁碗15が出土した。

No. 157 地山となる5層上面で柱穴・小穴・落ち状の遺構を検出した。3層から須恵器皿16・17・白磁碗21・瓦23、遺構1から須恵器皿19、遺構2から土師器皿20、遺構4から土師器皿18・須恵器皿22が出土し、全て室町時代と思われる。

No. 158 4層から室町時代頃を中心とした備前焼播鉢25・須恵器碗・土師器皿片等が出土した。

No. 159 5層からごく少量であるが、土師器皿・白磁碗片等が出土した。

No. 163 5・6層上面で土坑状の遺構を検出した。埋土から中世と思われる瓦24・土師器皿が出土した。

No. 165 地山となる4層上面で柱穴や土坑を検出した。時代は不明であるが、遺構1・3埋土から土師器片が出土した。

No. 131・155・167 先述のようにハバ古墳は現存しないが、古墳の周辺に付随する遺構の有無および墳丘の状態を調べるためにトレンチ調査を行った。玄室周辺のNo. 131・167は農地改良工事の影響を大きく受けており、工事による整地層の直下が地山である。No. 155は約2m程度の段差で低くなっており、古墳の周辺の遺構や包含層の検出が期待されたが、皆無であった。旧耕土層の堆積から上述の工事以前から耕地化による削平がすすんでいたと推定される。

2. まとめ

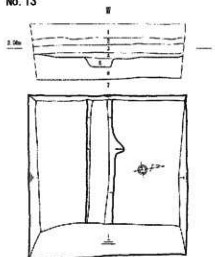
門の上遺跡については、従来の遺物散布地よりやや東に位置するNo. 13・15・145・156・157・158・159で、平安時代～中世の遺構・遺物を確認することができた。条里型地割の平野部縁辺部に位置し、条里型地割の再開発に伴い集落が成立したと推定される。

南平遺跡については、従来の遺物散布地よりやや南に位置するNo. 52・96・120・163・165で、室町時代頃の遺構・遺物を確認することができた。南辺寺山系東側の緩斜面の開発に伴い集落が成立したと推定される。

海田遺跡も散布地として登録されているが、周辺で埋蔵文化財の包蔵は確認できなかった。湿潤地で集落が立地するような場所ではなかったと推定される。

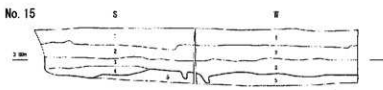
ハバ古墳周辺において、トレンチ調査を行ったが、古墳に付随する遺構は見発できなかった。また墳丘を示すような土層堆積も見られず、開発により大規模な削平が行われたと推定される。(山崎)

No. 13



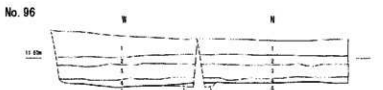
1. 灰黄褐色 10P6/7 粘砂質土 (雑作土)
2. 灰白色 10P7/1 砂質土 (Fe 少量)
3. 黄白色 10P7/2 砂質土 (Fe 少量)
4. 灰白色 10P7/3 砂質土 (Fe 少量 - 遺物少し含む)
5. 褐色 10P8/1 粘砂質土 (Fe 少量 - 遺物含む、遺物埋む)
6. 黒褐色 10P8/2 粘砂質土 (Fe 少量 - 土層に遺物少し含む)
7. オリーブ褐色 10P8/3 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)

No. 15



1. 灰黄褐色 10P6/1 粘砂質土 (雑作土)
2. 灰白色 10P7/3 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)
3. 褐色 10P8/1 粘砂質土 (Fe 少量含む)
4. 灰黄褐色 10P6/1 粘砂質土 (Fe 少量含む)
5. 灰白色 10P7/3 粘砂質土 (Fe 少量含む)
6. 灰白色 10P7/4 粘砂質土 (Fe 少量含む)

No. 96



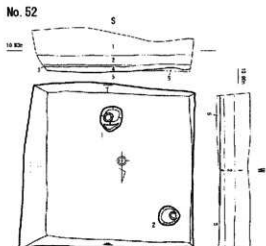
1. 灰黄褐色 10P6/2 土 (雑作土)
2. 黄褐色 10P7/3 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量)
3. 灰黄褐色 10P7/4 粘砂質土と灰黄褐色 10P8/2 粘砂質土層ごもる (Fe 少量、Fe 少量含む)
4. 灰黄褐色 10P8/2 粘砂質土 (Fe 少量含む)
5. 灰白色 10P8/3 粘砂質土 (Fe 少量 - 遺物少し含む)
6. 灰白色 10P8/4 粘砂質土 (Fe 少量含む)

No. 120



1. 灰黄褐色 10P6/2 土 (雑作土)
2. 黄褐色 10P7/3 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量)
3. 黄褐色 10P8/1 粘砂質土 (Fe 少量、遺物少し含む)
4. 褐色 10P8/2 粘砂質土 (Fe 少量 - 遺物少し含む)
5. 褐色 10P8/3 粘砂質土 (Fe 少量 - 遺物少し含む)
6. 灰白色 10P8/4 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)

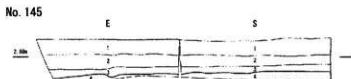
No. 52



1. 灰黄褐色 10P6/1 粘砂質土 (雑作土)
2. 黄褐色 10P7/4 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)
3. 灰白色 10P7/2 粘砂質土
4. 褐色 10P8/1 粘砂質土 (Fe 少量含む)
5. 黄褐色 10P8/2 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)

0 (5-1/2) 2m

No. 145

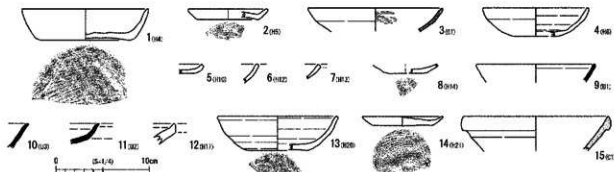


1. 黄褐色 10P8/1 土 (雑作土)
2. 灰白色 粘砂質土 10P7/3 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)
3. 黄褐色 10P8/1 粘砂質土 (Fe 少量、遺物多く含む)
4. 黄褐色 10P8/2 粘砂質土 (Fe 少量含む)

No. 156

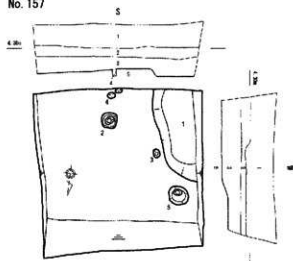


1. 灰黄褐色 10P6/2 土 (雑作土)
2. 灰黄褐色 10P7/4 粘砂質土 (Fe 少量、Fe 少量含む)
3. 黄褐色 粘砂質土 10P8/1 粘砂質土 (p2-5層の埋む)
4. 黄褐色 粘砂質土 2. 5P2/1 粘砂質土 (遺物、p2-5層の埋む)
5. 灰白色 10P7/2 粘砂質土



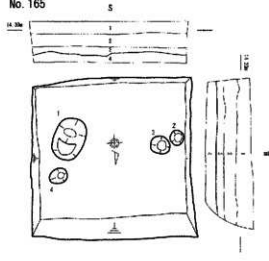
調査区平面図・層序図・出土遺物

No. 157



1. 灰黄褐色 1000/2 土 (耕作土)
2. 砂黄褐色 2 377/6 砂質土 (Fe 少し炭素)
3. 黄褐色 7 575/1 砂質土 (Fe 少し、炭素含む)
4. 黄褐色 7 575/1 砂質土 (Fe 少し、炭素含む)
5. 褐色 7 575/6 砂質土 (Fe 少し炭素)

No. 165



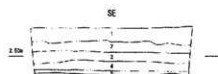
1. 灰黄褐色 1079/2 土 (耕作土)
2. 黄褐色 1079/1 粘砂質土 (Fe 炭素)
3. 黄褐色 2 576/1 砂質土 (Fe 炭素)
4. 黄褐色粘砂質土 2 577/1 砂質土 (Fe 炭素、Mn - δ2 - 5cm 次の粘砂質土)

No. 158



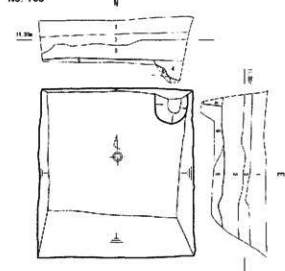
1. 灰黄褐色 1000/2 土 (耕作土)
2. 灰黄褐色 1000/1 粘砂質土 (Fe 少し炭素)
3. 黄褐色 1000/1 粘砂質土 (Fe 炭素)
4. 黄褐色 7 575/1 粘砂質土 (炭素含む)
5. 灰黄褐色 7 575/1 粘砂質土 (Fe 炭素、Mn 含む)

No. 159



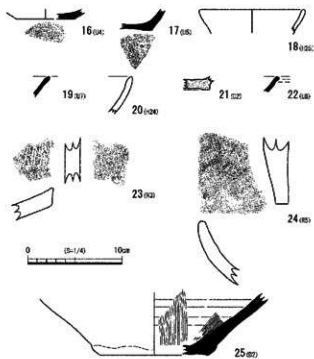
1. 灰黄褐色 1079/2 土 (耕作土)
2. 砂黄褐色 1079/1 砂質土 (Fe 少し炭素)
3. 黄褐色 1079/1 粘砂質土 (Fe 炭素)
4. 黄褐色 2 576/1 粘砂質土 (Fe 炭素、Mn 少し炭素)
5. 黄褐色 2 576/1 粘砂質土 (Fe 少し、炭素少し炭素)
6. 粘砂質土 2 576/1 粘砂質土 (Fe 炭素、Mn 含む)

No. 163



1. 灰黄褐色 1079/2 土 (耕作土)
2. 黄褐色 7 577/4 砂質土 (Fe 炭素、炭素)
3. 黄褐色 7 575/1 粘砂質土 (Fe 少し炭素)
4. 黄褐色 7 575/1 粘砂質土と黄褐色 1000/1 粘砂質土と混じる (遺物含む、炭素含む)
5. 黄褐色 7 575/4 砂質土
6. 黄褐色 7 575/4 粘砂質土 (δ2 ~ 5cm 次の黄褐色)
7. 灰オリーブ褐色 7 573/3 粘土 (Fe 炭素)

0 1m (5=1/50) 2m



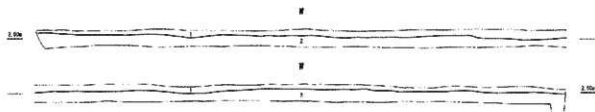
調査区平面図・層序図・出土遺物

No. 131



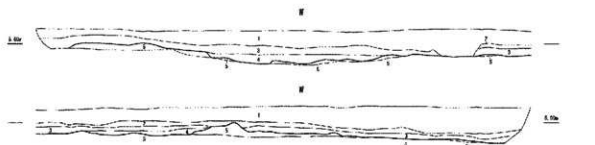
1. 褐色色 10P7/1土 (粘砂土)
2. 紫黒褐色 10P7/2粘砂質土 (Fe 少量)
3. にごり黄褐色 10P7/3～黄褐色 10P7/4粘砂質土 (Fe 少し沈降, e2 - 5m 大の礫り層を含む)

No. 155

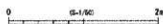


1. 潔白色 10P7/1粘砂質土上にぶい黄褐色 10P7/4～紫黒褐色 10P7/6粘砂質土層になる
2. にごり黄褐色 10P7/4～黄褐色 10P7/6粘砂質土 (Fe 少し沈降, e2 - 5m 大の礫り層を含む)

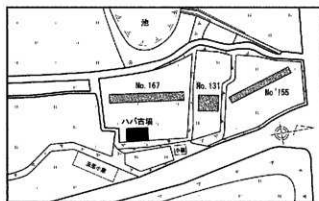
No. 167



1. 褐色
2. 灰褐色 2 5P7/1粘砂質土
3. 黄褐色 2 5P7/2粘砂質土
4. 灰褐色 5P7/3粘砂質土 (e2 - 5m 大の礫り層を含む)
5. 褐色にごり黄褐色 5P7/4粘砂質土 (e5 - 10m 大の礫り層を含む)



層序図



調査区設定図

令和5（2023）年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅻ

2017年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

TEL 0799-42-3849

印刷 株式会社 奥井印刷

〒656-0513 兵庫県南あわじ市賀集野田459-1

TEL 0799-53-1314